(財) みずほ教育福祉財団
障害児教育研究助成事業

障害児教育研究論文

—平成18年度—

筋ジス児を支援するための教育・医療のあり方に関する未来志向的研究

北海道八雲養護学校
長谷川　和　之　(代表)

平成19年3月

研究協力：国立特殊教育総合研究所

筋ジス児を支援するための教育、医療の在り方に関する未来志向的研究

北海道八雲養護学校　　長谷川　和　之（代表）

要旨：　特別支援教育を推進させるために、医療機関と教育機関の連携は必要不可欠のものとなってきている。特に筋ジストロフィーという疾患は、小児期発症の慢性疾患ゆえに、専門医による診断と、それに基づいた生涯の発達を見通した継続的な教育実践が必要となる。

そこで、本校と独立行政法人国立病院機構八雲病院の医師、看護師、作業療法士、理学療法士などの多職種が中心となって、町営プールやタクシー業者なども含む諸機関と協働し、教育と治療の融合を目指した一つの実践として、ハロウィック水泳法を活用した水泳活動の試みを１章で述べる。

また、上記の水泳活動によって生み出された協働できる関係を基盤に、教育機関と医療機関等の多職種が、連携を図り、円滑にかつ明確に共通の目的をもって筋ジス児の自己肯定感（以後、セルフエスティームと記述）を育む活動を作り出すためのいくつかの実践を２章で述べる。

キーワード：筋ジス　医教連携　セルフエスティーム　協労　ハロウィック水泳法

はじめに

近年の非侵襲的人工呼吸や心保護治療などの専門医療の進歩に伴い、筋ジストロフィー（以後、筋ジスと記述）患者の生命予後は５年から10年以上改善した。患者自らが、いかに主体的に選択し、充実したものにするかが重要になってきた。筋ジス児が適切な治療を活用し得る人生を送るためには、繰り返される機能の喪失体験により低くなりがちなセルフエスティームを育みつつ、延命された生涯を見通した教育内容の工夫が緊急課題となっている。

障がいのある児童生徒の支援に活用されていくことになるＩＣＦ（International classification of Functioning, Disability and Health：国際生活機能分類、2001年７月ＷＨＯ総会で採択）を共通言語に、それぞれ多職種の心が込められた実践が期待されるが、実は、国立特殊教育総合研究所上席総合研究員の西牧謙吾先生に水泳活動の構想段階から、本校での講演の機会を通じて次のような貴重なアドバイスをいただいた。「八雲発の連携モデルは作れないでしょうか？病院と養護学校が協力して、筋ジスの人たちで自立できるモデルを考えましょう。そして筋ジス児が在籍する病弱養護学校と肢体不自由養護学校のネットワークをつくりましょう。地域の学校に通う全国の筋ジス児も救われます。」という内容である。そこから、国立特殊教育総合研究所、独立行政法人国立病院機構八雲病院、その他関係機関と本校の協働体制による近未来思考的な病弱教育の在り方を模索し始めた。その一連の取り組みはじめたことについて述べる。

目　　次

はじめに …… 1

第1章　北海道八雲養護学校の概要 …… 3

1　沿　革 …… 3

2　特　色 …… 3

第2章　実　　践 …… 5

1　ハロウィック水泳法を取り入れた水泳活動の実践 …… 5

（1）はじめに …… 5

（2）水泳活動の意義 …… 5

（3）水泳活動の実践 …… 5

（4）まとめと考察 …… 8

2　水泳活動の実践を通して生み出された多職種連携の展開 …… 10

第3章　事　　例 …… 11

事例1　学校と病院を結ぶニーズ調査と就労支援の取り組み …… 11

事例2　学校ＷＥＢページを活用した情報発信 …… 17

事例3　医教連携による安全な環境づくり …… 19

事例4　双方向の支援　北海道留寿都高等学校との交流を通して …… 20

事例5　支援技術の学習と多職種の支援 …… 22

第4章 研究のまとめ …… 25

引用文献参考文献 …… 26

資　　料

資　料1　水泳活動アンケート結果

資　料2　留寿都高校の概要、交流会アンケート結果

第１章　北海道八雲養護学校の概要

１　沿　革

本校は昭和32年に八雲町立八雲小中学校の特殊学級「ひまわり学院」（通称）として発足した。当初は肢体不自由、慢性疾患の児童生徒が主であったが、昭和39年以降筋ジス児が在籍するようになった。昭和45年に道立に移管し北海道八雲養護学校となったが、ひまわり学院の開設を起点として平成19年には開校50周年を迎えることになる。

筋ジスをはじめとする神経筋疾患及び重度重複障がい児をおもに受け入れる八雲病院に併設する学校として、これまで肢体不自由及び病弱教育の実践及び研究活動に全校を上げて取り組んできているところである。また、今年度から高等部を卒業して八雲病院で継続療養をする卒業生に対する支援について、進路指導係を中心として新たな取り組みを開始したところである。

２　特　色

（１）児童生徒について

児童生徒数は小学部６名、中学部９名、高等部22名の計37名である。児童生徒のほとんどは八雲病院に入院しているが、地元からの通学生が１名と家庭への訪問教育を行っている生徒が１名いる。筋ジス等の神経筋疾患児が３分の２を占め、脳性まひ等の重度重複障がい児が残りの３分の１を占めている。また、児童生徒の出身地は、八雲病院が筋ジスの治療を専門に行っている道内唯一の病院であることから広く全道にわたっている。さらに、高等部卒業後の進路動向はその大半が「継続療養」となっており、卒業後の生活に対する支援のあり方が学校及び病院にとっての大きな課題となっている。

表１　出身地別児童生徒数

管内	渡島	檜山	石狩	十勝	胆振	日高	上川	後志	道外
児童生徒数	１３	３	３	５	３	１	４	３	２

表２　病種別児童生徒数

病種	小	中	高	合計
デュシャンヌ型筋ジストロフィー		４	１４	１８
先天性筋ジストロフィー			１	１
筋強直性ジストロフィー		１		１
先天性ミオパチー		１		１
脊椎性筋萎縮症	２	１		３
脳性麻痺	３		５	８
コルネリア・デ・ランゲ症候群			１	１
水頭症		１		１
レット症候群			１	１
低酸素脳症		１		１
その他	１			１
合計	６	９	２２	３７

（２）教育課程

ア　学校教育目標

学校教育目標は図１の通りである。

表３　高等部卒業生の動向

年度	卒業者数	継続療養	施設等入所	自宅療養	就職・作業所	通信制大学等
～６３	４９	３６	９	４	－	－
元	１０	９	１	－	－	－
２	１５	１３	－	２	－	－
３	８	６	１	１	－	－
４	１２	１０	１	１	－	－
５	１０	８	２	－	－	－
６	１３	１２	－	１	－	－
７	１１	１０	１	－	－	－
８	１１	１０	１	－	－	－
９	１３	１１	１	１	－	－
１０	７	５	１	１	－	－
１１	１０	７	－	３	－	－
１２	１２	７	１	２	２	－
１３	１１	１０	－	－	１	－
１４	９	８	－	－	－	１
１５	９	６	－	１	１	１
１６	６	６	－	－	－	－
１７	７	７	－	－	－	１
計	２２３	１８１	１９	１７	４	３

平成18年10月に、特別支援教育の動向を踏まえた教育目標となるように改善を図り、一部変更した。

イ　教育課程

それぞれの学部には小・中学校及び高等学校に準じた教育課程と、重複障がい児童生徒の教育課程がある。また、重複障がい児童生徒については、知的障がい養護学校の学習指導要領によって学習を行っているが、実態に応じて教科別の指導を主とする教育課程、いわゆる領域を合わせた指導を主とする教育課程、自立活動を主とする教育課程の3つを柱にして、個々の児童生徒のニーズに応じた教育課程を編成している。

学校教育目標
社会の中で自らの可能性を追求する人間性豊かな人を育てる

学校教育の基本姿勢
充実した生活の創造 ・積極的に学ぶ姿勢の育成 ・人とのかかわり合いを大切にする気持の育成 ・健康で安全な生活を送る習慣の育成

図1　北海道八雲養護学校学校教育目標

表4　北海道八雲養護学校教科領域配当時数

学部	教科等	教科別の指導									道徳	特別活動	自立活動			合計
	学級	国語	社会	算数数学	理科	音楽	図工美術	保健体育	技術家庭	英語						
	普通	4	2	3.2	2	1.4	1.4	2	1		1	1	1	1		21
	重複					2		2					12		5	21
中学部	普通	3	2.5	3	2.5	1	1	2	1	3	1	1	1	2		24
中学部	重複Ⅰ	4	2	4	2	1	2	2	1		1	1	2	2		24
中学部	重複Ⅱ	3		3		2	2	2					3		9	24

高部	教科等	各教科・科目														特別活動	自立活動	総合的な学習時間	領域教科を合わせた授業	合計
	学級	国語	社会		数学		理科	保健体育		音楽	英語	職業・家庭		情報	美術	商業				
			現代社会	世界史A	数学Ⅰ	数学A	理科総合A	保健	体育			家庭総合								
	1A	4		2		3	2	1	2	2	3	1		1		1	1	2	1		26
	2A	4		2		3	2	1	2	2	3	1		1		1	1	2	1		26
	3A	4	2		3		2		2	2	4	1		1		1	1	2	1		26
	重複Ⅰ	4	1		3		1	2		2	1	1		1	2		2	3	1	2	26
	重複Ⅱ	4	2		3		2	2		2	1	1		1	2		1	4	1		26
	重複Ⅲ							2		3					2		1	9		9	26

第2章　実　　践

北海道八雲養護学校で、セルフエスティームを育む教育を実践するために児童生徒たちが入院する八雲病院を中心とした多職種が協働できる組織をつくり、ハロウィック水泳法を取り入れた水泳活動を実践している。また、その実践を通して築いてきた強固な医療と教育の連携（以後、医教連携と記述）を生かし、多職種が協働するシステムを作り、稼働させることは筋ジス児のセルフエスティームを育み、生活の質（以後、ＱＯＬと記述）の向上に結びつくと考えた。さらにこの多職種連携が、全国の筋ジス児を視野に入れた特別支援教育の推進につながっていくものと確信している。第２章では、そのようなねらいで取り組んでいるハロウィック水泳法を取り入れた水泳活動の実践及び、医教連携により協働するシステムを生かしたいくつかの実践について報告する。

1　ハロウィック水泳法を取り入れた水泳活動の実践

（1）はじめに

北海道八雲養護学校で、水泳活動を行おうと考えたきっかけは、平成15年4月に本校教諭が知り合いの神戸市在住の養護学校教諭から、筋ジス協会で作成された「挑戦しよう！スポーツに」ビデオと冊子を紹介されたことから始まる。それらを参考に、全国の養護学校では初めてとなる“ハロウィック水泳法”を導入することにしたのは、筋ジスを中心とした障がいを持つ方々にとって、生涯スポーツとして、また特別支援教育に向けても効果が期待できると考えられるからである。『児童生徒たちが、安全に安心して水泳活動に取り組む』ために、併設する八雲病院と相談しながら準備を行った。ここでは、平成17年および平成18年度に八雲町営プールで、ハロウィック水泳法を取り入れた水泳活動を実施したその過程と今後への展望を述べる。

（2）水泳活動の意義

「筋ジス患者が、適切な治療を活用することにより、延命し得る人生を、自ら主体的に選択し、充実したものにすることができるか」。この課題に沿った教育の展開において、セルフエスティームを育むことは最も大切な要素の一つである。そこで、水泳活動実施の意義を、下記のように想定した。

① 周りが環境を整え、不安を軽減する。
↓
② 不安を軽減すれば、児童生徒たちは自ら主体的に選択し、行動する。
↓
③ 自ら行動すれば、自らの壁を突き破ることができる。
↓
④ それがセルフエスティームを育むことにつながる。

図2　水泳活動実施の意義

（3）水泳活動の実践

① 周りが環境を整え、不安を軽減する。

水泳活動を安全に実施する『環境整備』のために、以下の三点を重視した。

ア　水泳活動計画を立案、周囲に提示し、準備を進める。

イ　十分な人数の教員がハロウィック水泳指導と必要な介助技術を習得する

ウ　水泳活動当日の人的・物的な環境整備に重点を置き、安全な実施を図る。

それぞれの項目について以下に解説する。

ア　水泳活動計画を立案、周囲に提示し、準備を進める。

表5の行程で準備を進めた。

表5　水泳活動計画

平成15年度	
4月	・筋ジス協会「挑戦しよう！スポーツに」ビデオと冊子を紹介される。
平成16年度	
6月	・八雲病院小児科医長に水泳活動について相談
7月	・八雲町教育長にハロウィック講習会及び水泳活動についての協力依頼

8月	・八雲病院（院長、小児科医長、総師長）と学校（学校長、教頭、各学部主事など）との協議 ・ハロウィック講習会の日時などの設定
9月	・平成17年度水泳活動実施に向けての指導技術および介助習得計画説明会（教職員）
10月	・水泳活動についての各学部教職員の意見集約
11月	・水泳活動推進計画の教職員へ提示
12月	・ハロウィック講習会の実施要領の教職員提示
1月	・ハロウィック講習会の実施
平成17年度	
4月	・日時や目的などの大まかな実施計画の提示
5月	・水泳活動に伴う研修計画立案
7月	・水泳活動計画細案の提示　実技講習会、移動研修、着替え研修などの実施 ・平成17年度水泳活動実施
11月	・ハロウィック講習会に3名自主参加（京都コース）
平成18年度	
4月	・水泳活動推進委員会設置
5月	【水泳活動推進委員会】 ・日時や目的などの大まかな実施計画の提示
6月	【水泳活動推進委員会】 ・水泳活動に伴う研修計画立案
7月	【医教水泳活動実施会議】 ・実技講習会、移動研修、着替え研修、救急蘇生法研修などの実施 ・平成18年度水泳活動実施
9月	【水泳活動推進委員会】 ・高等部校外学習としての水泳活動計画立案、実施
11月	【水泳活動推進委員会】 ・平成18年度水泳活動のまとめ

水泳指導技術にはハロウィック水泳法を取り入れた。正しいハロウィック水泳法の技術を習得するため、平成17年1月15日～16日に八雲町営プールでハロウィック水泳法協会主催の指導者養成講習会を教諭向けに開催した。この講習会には、札幌の社会福祉法人ＨＯＰ（本校卒業生が社長）職員と江差の授産施設あすなろ学園の指導員も参加を希望した。国際ハロウィック水泳協会の規定で、1度の講習における参加者の上限が24名という規約がある。このため、希望教諭のうち22名、上記の指導員・ボランティア2名の合計24名が参加した。予定されたファンデーションコース1、2の修了者は、23名であった。1名は体調不良のため初日のみの参加となり、修了認定に至らなかった。

ハロウィック水泳法の講習会を受講した後、実際の児童生徒を想定した研修を、八雲町営プールにおいて17年度は2回、18年度は1回実施した。

教員の移動や着替えの介助技術の養成は、理学療法室長によるトランスファー研修や八雲病院看護師らによる着替え研修を実施して行った。トランスファー研修は平成17年度、18年度共に3回行った。着替え研修は、平成17年度は八雲病院1～3病棟で3回、平成18年度は八雲病院1～3病棟及び5～7病棟で3回行った。

水泳活動当日の実施体制は表6の通りである。

表6　水泳活動実施体制

平成17年度	
実　技	校長、教頭、教諭13名、 （福）ＨＯＰ1名
介　助	保護者4名 教諭19名、養護教諭1名
記　録	教諭1名　実習助手1名
プールサイド支援	八雲病院看護師長 理学療法室長 教育委員会 （福）ＨＯＰ代表
病院での支援	医師、看護師、介護療法士、指導員、保育士、教諭
平成18年度	
実　技	教諭13名 社会福祉法人ＨＯＰ2名 神戸大学研修医1名 八雲病院理学療法室長1名 同理学療法士（以後、ＰＴと記述）1名
介　助	教諭19名、養護教諭1名
記　録	教諭1名、実習助手1名
プールサイド支援	国立特殊教育総合研究所主任研究員 八雲病院看護師長 教育委員会
病院での支援	医師、看護師、介護療法士、指導員、保育士、教諭

② 不安を軽減すれば、児童生徒たちは自ら主体的に選択し、行動する。

本校において初めての水泳活動であり、ハロウィック水泳法は全国養護学校初の導入であったため、職員会議で水泳活動参加児童生徒の基準を設定した。

参加するのは、1，生徒本人による明確な同意　2，保護者の合意　3，主治医の許可　この3条件全てを満たす児童生徒とした。ただし、1の生徒自身による明確な同意を客観的に複数が確認することが難しい児童生徒には、保護者が水泳活動当日同伴することにより、参加を可能とした。

保護者には、平成17年6月9日ＰＴＡ総会後に水泳活動事前説明会を開催した。その同意を得て、児童生徒には平成17年6月13日に水泳活動説明会を開催した。その後、児童生徒にアンケート（資料1）を配布し、参加の意思を確認した。結果は、明確な意思表示が可能な生徒18名中16名が、一部に不安を抱えながらも参加の意思を表明した（資料2）。なお、参加したいという意思を表明した児童生徒の保護者全員が、参加に賛同していただいた。明確な意思表示が難しい生徒は、6名の保護者から当日同伴可能で参加したいとの希望が出され、参加希望生徒の合計は22名となった。

当日は、ちょうど数日前から一部の病棟で流行した夏風邪のために参加を断念せざるを得なかった児童生徒4名いたが、平成17年7月28日に、参加児童生徒18名（デュシェンヌ型筋ジストロフィー13名、先天性進行性筋ジストロフィー1名、脳性まひ及び重度知的障がいなどの重症心身障がい児4名）が、水泳活動を楽しむことができた。

平成18年度においても前年度同様に、水泳活動に参加するために17年度同様の基準を設けた。ただし前年度の実績を基に、①の生徒自身による明確な同意を客観的に複数が確認することが難しい児童生徒においても保護者が同意することにより参加を可能とした。そして保護者には、ＰＴＡ総会後に水泳活動事前説明会を開催し、その同意を得て、児童生徒には水泳活動説明会を開催した。その後、児童生徒にアンケートを配布し、参加の意思を確認した。そして平成18年7月29日に、昨年度水泳活動を体験した卒業生4名を含む児童生徒31名（デュシェンヌ型筋ジストロフィー16名、先天性進行性筋ジストロフィー2名、脊髄性筋萎縮症2名、脳性まひ及び重度知的障がいなどの重症心身障がい児11名）が、水泳活動を楽しむことができた。

③ 自ら行動すれば、自らの壁を突き破ることができる。

平成17年度は、自らの意思で水泳活動を行うと表明した児童生徒で、水泳活動に参加できた児童生徒14名（デュシェンヌ型筋ジストロフィー13名、先天性進行性筋ジストロフィー1名）に、水泳活動終了後、私自身が各病棟で本人にアンケートを配布し、児童生徒自らが筆記（一部筆記介助）し、翌日の登校時にアンケート回収箱に投函してもらい、回収した。また、平成18年度は16名を対象とした。水泳活動後児童生徒アンケートの結果は以下の表7、表8となった。（詳しい結果は巻末の資料①を参照）

表7　平成17年度のアンケート結果

質問　プールに入って良かったですか。	
・とても良かった	8名
・良かった	5名
・普　　通	1名
・良くなかった	0名
質問　プールは安心して活動できましたか。	
・とても安心だった	5名
・安心だった	9名
・不安だった	0名
・とても不安だった	0名
質問　来年も水泳活動を行う場合、あなたは参加しますか。	
・絶対に来年も入りたい	10名
・友達が入るなら	3名
・入りたくない	1名
質問　水泳活動全体を通して思ったこと、感じたことを書いてください。（自由記述）	
・楽しかった・もっと入りたい、など水泳活動を積極的に評価	11名
・な　し	2名
・未記入	1名

このうち、平成17年度水泳活動参加者の事前の意識は、「ぜひ参加したい」7名　、「友達が入るなら」7名、「わからない」0名、「入りたくない」0名であった。

表８　平成18年度のアンケート結果

質問　プールに入って良かったですか。	
・とても良かった	10名
・良かった	6名
・普　　通	0名
・良くなかった	0名
質問　来年も水泳活動を行う場合、あなたは参加しますか。	
・絶対に来年も入りたい	14名
・友達が入るなら	2名
・入りたくない	0名
質問　水泳活動全体を通して思ったこと、感じたことを書いてください。（自由記述）	
・「もっと長く泳ぎたい」や「種目を増やしてほしい」など水泳活動を積極的に評価	10名
・「身体が動いた」と評価	1名
・「親子での活動を望む	1名
・記入なし	4名
・未記入	1名

④ セルフエスティームを育むことにつながる。

平成17年度の初めて水泳活動終了後のアンケートでは、「プールに入って学んだことは、気づいたことは何ですか」という質問に対し、「動けた、泳げた」7名、「楽しい、うれしい」2名、「暑い」1名、「特に無し」1名、「未記入」3名という結果が出た。また、筋ジス児の自由記述では表現は異なっているが、『動けた、泳げた』という身体活動に対しての記述が50％占めた。これは、水の浮力や流れが与える身体への効果と相まって、自分の身体が再び思い通りにできる部分があったことに対する驚きや喜びの新発見であったことを感じさせるものであった。

一方、2年目になる平成18年度のアンケートでは、「身体が動く」が1名のみであり、かわりに「水泳活動の時間延長や回数の増加」、「種目のバリエーションの増加」を望む者が10名に達した。思春期に身体が思い通りにならなくなる進行性疾患によって、種々に取り組む課題に対して「あきらめない」ようにするのが難しくなってくる筋ジス児が、身体が動くことは当然なことと理解している活動は、その身体の動きの限界を再認識することにより、自分の様々な潜在能力を信じ、発想や選択肢を拡げることにつながる可能性がある。その心理的効果は、セルフエスティームを育むことに主題をおいた本活動の目的自身でもあり、注目したいところである。

また、平成17年度及び18年度アンケートを通しては水泳活動自体に否定的な意見はなかった。しかし、「なし」や「未記入」の児童生徒もいる。否定的な意見を書こうとして思いとどまったのか、自らの肯定的見解をうまく言葉にできないのか、今後、個々の児童生徒の真意を引き出せるように、指導を続けるが、在校生における17年度水泳活動体験者の全員が18年度の水泳活動に参加し、かつ次年度も活動に参加する意思表示をしていることから、ほぼ否定的な意見ではないことが確認されたと受けとめている。

（4）まとめと考察

筋ジストロフィーという疾患のために、思春期という心身の成長の中で、目に見えてできることがどんどん喪失していく。繰り返される喪失体験と明日への期待が裏切られた思いから生まれる筋ジス児の「不安」を責めることはできない。

しかし、水泳活動の意義の想定①～④に述べたように、環境を整えることで、「不安」を軽減すれば、筋ジス児は自ら行動を起こし、セルフエスティームを育んでいくことができるのではないだろうか。

また、計画から実践を通して、新たな課題も見えてきた。「適切な治療により、5年から10年以上も改善した筋ジス患者の生命予後を活用し得る人生を、自ら主体的に選択し、充実したものにするために、セルフエスティームを育みたい」。そのために筋ジス児の「不安」をいかに軽減することができるかが周囲の取り組むべき課題の一つなのである。それは決して、教職員自らが児童生徒と一緒に、あるいはそれ以上に不安に陥り、その対策を拒み、実施に消極的になることで、解決するものではない。

平成17年の教職員アンケートから平成18年度教職員アンケートの内容は、児童生徒たちの活動を広げようとする積極的な意見に劇的な変化を見せた。（巻末資料①を参照）

ハロウィック水泳法を取り入れた水泳活動は、水泳活動自体が本校にとっては初めての試みだったことと、校内にプールは無かったこともあり、「挑戦しよう！スポーツに」を紹介されてから、水泳活動実施までに2年以上の準備を必要とした。そのような中で、八雲病院や八雲町や社会福祉法人などの多職種の方々の協力を要請し、「筋ジス児が持つ不安を軽減できる環境を整える」という実践が必要とされていることを、多くの教職員と児童生徒と共に学ぶことができた。

今後の水泳活動や、様々な取り組みにおいて、児童生徒の環境を整えるためには、全ての教師が心理的葛藤を乗り越え、納得、協力して安全な体制を作りはじめ、安心の文化を育みつつある。ここで、前述の筋ジストロフィー協会発行の「挑戦しようスポーツに」を執筆した「太陽の門」河原仁志施設長の「安全と安心は違う。安全は基準であり、安心は自らが行動しないと得ることはできない。」という言葉が思い起こされる。

また、水泳活動の積極的なバリエーションの展開を児童生徒たちが望み始めたが、実はハロウィック水泳法は、英国の養護学校で開発されてから50年以上の歴史がある。今回行った導入段階にあたるカヌーや自転車こぎ、ジャンケン列車などの遊びのメニューから、プールに入る頻度や個人の力に合わせて目標を設定し、横軸回転や矢状軸回転など上級のステップに進むこともできるのである。児童生徒たちの活動のニーズに応えるだけでなく、体育の授業における水泳分野で、少なくとも近代4泳法でなくとも、体育的かつ客観的な評価が可能であり、何も確立されたものがない水遊び的な水泳活動からの脱却が可能になる。そういった意味では、本校だけではなく、ハロウィック水泳法が特別支援教育に携わる学校において、適切な評価を求められる体育的な活動の参考になることを期待している。

そして本校にとっての今後の課題は、今後、この水泳活動を特別支援教育にどのようにして生かしていくかである。

北見在住のＳＭＡ患者の幼稚園児と母、釧路在住の筋ジス児の小学生と両親と担任が本校と八雲病院に教育相談に訪れたり、地元の幼稚園の教諭4名がハロウィック水泳法の講習に参加したりした。そして適切なリハビリを兼ねた活動を紹介するということで、児童生徒、保護者、担任の教員を対象に、医師、理学療法士、教諭が町営プールでの実技指導や、本校の体育館でフロアーホッケーや本校で開発したスティックバスケなどの実技指導を行った。医療機関と協働した実践内容の紹介や教育相談が縁で、その北見在住のご家族は、地元で水泳活動を実践しているという報告を聞いた。これは本論文のテーマである「筋ジス児を支援するための教育、医療の在り方に関する未来志向的研究」そのものであるとともに、特別支援学校としての役割を果たす形の一つであろうと考えている。

また、全国のネットワークを持つ筋ジス児に関する教育のセンター校、いわばセンターオブセンターとしての役割を果たすためには、医療機関と学校の協働による質の高い教育活動の実現を目指して、現在、教員と医師、理学療法士などの病院スタッフと協働で、ミーティングを重ね、筋ジス児にとって水中でどのような運動に効果があるのか活動の内容を検討しているところである。

現在、確認していることは以下の通りである。

ア　筋ジス児におけるリハビリを兼ねた最も効果的な運動は、低負荷で、高頻度な運動で、自発的な活動であること。反対に筋ジス児にとって質のよくない動きは高負荷低頻度の動きであること。

イ　水泳活動実施時に、理学療法士と協働で、水中での動きをビデオに撮影し、その活動を評価した。自発的に動かすことができる可動域は陸上に比べ、圧倒的に大きいことが確認された。その運動は低負荷で、高頻度な運動で、自発的な活動であること。

ウ　筋ジス児にとって指先などは比較的自由に動くが、進行性の慢性疾患ゆえに加齢に伴って上腕、下半身、腰といった大きな筋肉を大きく動かすことは難しくなる。よってその陸上での活動は必然的に受け身になりがちであり、高負荷、低頻度な運動にならざるを得ないこと。

エ　筋ジス児であっても水中では、大きな動きをすることが可能であることは、自分にもできるというセルフエスティームを育む効果がある。また、ボディイメージをつくることに有効である。

オ　筋ジス児にとってのリハビリで最も重要なことの１つの要素に、呼吸のリハビリテーションになる心肺機能のトレーニングがある。その活動の重要な点は運動を継続することによって無酸素運動から有酸素運動に切り替わるポイントに達するかどうかであること。そのような良質な運動＝リハビリを発達期から取り入れることはさらなる延命を実現する可能性を秘めていること。

カ　水泳活動の実施頻度を高くすることで、リハビリの効果を高めることができる。

水泳活動というひとつの運動の中にも、リハビリ的な要素と教育的な要素が含まれており、双方を兼ねた運動ができ得ることが、八雲病院のスタッフと協働する中でわかりはじめてきた。筋ジス児にとっての何が大切なのかという基本に立ち戻れば、教育と医療というカテゴリーに分ける必要もなく、筋ジス児にとっての環境因子の向上を図り、医教が協働した双方の効果が期待できる一つの良質な活動を生み出す方がよいのは明白である。それはまさにＩＣＦの大切な視点であろう。

また、特別支援教育の観点からは、さらに注目すべき点がある。まず、本活動の計画段階で、一部の教師から、裸になる生徒の感情を考慮し、「プールを貸切にした方が良い」という意見もあった。確かにそれも可能であった。しかし、せっかく町営のプールで行うことを考えると、一般町民にとって、「本校生徒の活動中、もしくは障がいのある方々の活動中は、プールを使用できない」というネガティブな見解を持っていただきたくなかったことと、むしろポジティブに社会との活動の融合をはかる機会になればと考え、プールの６レーン中３レーンお借りして、実施した。結果的には、本校の児童生徒が水泳活動をしているときに、横のコースで保育園の水泳活動や一般町民の方々が、普段どおり水泳を楽しんでおられる姿を児童生徒もお互いに微笑ましく見ている様子で、一緒に泳いで良かったと実感した。児童生徒説明会で「地域の方もいるところで、プールに入る」と説明したことに対して、一部の教師の危惧を吹き飛ばすかのように、水泳活動に参加する決断をした児童生徒たちに感謝したい。「自分達のために他を締め出す」ものは、結局は、必ず、「他から締め出されることになる」のが道理である。そして、そのような環境設定のもとでは、交流や地域の理解は生まれない。奢ることなく、卑下することなく、地域で一緒に生きていく。これは特別支援教育を推進して行く上でも、大切なコンセプトになると思われる。

筋ジス児にあきらめない、あきらめさせない教育を提供するために、最も大切なことは、まずは自分自身があきらめないことである。児童生徒を取り囲む環境因子である保護者、教師、主治医、看護師、ＰＴ、ＯＴ、指導員、ボランティアなど、それぞれがあきらめないことが、すべての第一歩である。

最後にハロウィック水泳法を取り入れた水泳活動は、水泳活動自体が本校初の試みだったため、児童と教職員の両者の不安を軽減する「環境を整える」条件作りに、筋ジス専門病棟のある国立八雲病院を中心とした多職種の連携が欠かせないものであった。中でも、八雲病院小児科の石川悠加医長、山下信子看護師長、三浦利彦理学療法室長、田中栄一作業療法士、国立特殊教育総合研究所上席総括研究官の西牧謙吾先生、風の森　施設長の河原仁志先生、ハロウィック水泳法協会の芝田徳三先生、江上潤子さん、川面幸男さん、野村和形さん、ハロウィック協会理事で三原の阿部真理子さん、ＨＯＰの竹田保社長、八雲教育委員会の方々、その他関係諸機関の皆様にあらためて感謝の意を表したい。

2　水泳活動の実践を通して生み出された多職種連携の展開

医療技術の向上が筋ジス患者の寿命延長をもたらし、卒業後を見越した教育の充実、進路指導、卒業後の支援、生涯スポーツなど筋ジス患者のＱＯＬの向上に直結するニーズを生み出した。それは、筋ジス児にかかわる多職種が協働するニーズを生み出し

たといっても過言ではないだろう。筋ジス患者の人生を豊かなものにするために、積極的に社会参加できる力を身につけさせ、卒業後に社会で活動出来る環境を実現させなければならない。ＱＯＬの向上を目指した教育の充実と支援体制の構築が望まれている。それは単なる改善ではなく、協働する組織の実現が必要となってくる。筋ジス児を取り巻く現在の状況を「ブレイクスルー（突破）」するためには、学校と病院を中心とした社会と融合したシステムを構築しなければならない。しかし、その実現には学校という単独の組織では難しい。そこで水泳活動の実践を通して生み出された多職種連携の組織を展開させ、多職種でシステムを構築することで、筋ジス児の人生が充実し、社会参加が少しでも実現できるのではないかと考えた。

筋ジス児が生涯を通し、いかに社会にかかわっていくのか。一人の人間として社会に貢献しようとする気持ちと、自らも参加している社会との一体感をいかにして味わわせるのか。筋ジス患者の心にセルフエスティームを育み、その人生が充実したものになるように願い、八雲病院を中心とした関係諸機関の多職種と協働したシステムを作り始めた本校の近未来志向的な５つの試みについて述べる。

事例１	学校と病院を結ぶニーズ調査と就労支援の取り組み。
事例２	学校ＷＥＢページを活用した情報発信
事例３	医教連携による安全な環境づくり
事例４	双方向の支援　北海道留寿都高等学校との交流を通して
事例５	支援技術の学習と多職種の支援

図６　５つの実践

第３章　事　　例

事例１　学校と病院を結ぶニーズ調査と就労支援の取り組み。

１　実践の概要

平成17年度末より、卒業生が自分の生活を主体的に選択し充実したものとするため、さらに卒業後の就労や社会参加という観点から学校全体で「卒業後の支援の必要性」が検討され、平成１８年より校務分掌及び学部業務に位置づけられる形となった。取り組みの初年度は、事例に即した支援の展開という実践方法を取り、高等部進路担当が病院に訪問するニーズ調査から開始する運びとなった。

２　卒業生のニーズ調査

平成18年４月より、高等部進路担当者１名が病院を訪問してニーズ調査を開始した。時間は週３回（月・水・金）×１時間である。具体的には、平成17年度卒業生３名を対象に、卒業後の活動を支援するという形で活動を共有しながらコミュニケーションをはかることから開始した。３名とも、病院作業訓練室で活動していたことから、病院ＯＴと協働での支援が始まった。ＯＴとの協働では、それぞれの立場や専門性を発揮しながらかかわる方針を打ち出した。３名それぞれ抱えるニーズは異なるが、分類すると「就労」「学習」「活動」への継続的な支援であり、様々な形での社会参加とコミュニケーションである。

必要な支援量は、定期的かつ継続的に行われてこそ意義あるものに成り得るであろうことから、個々のニーズに即した支援プランを作成し、事例ごとに支援を展開することとなった。

定期的かつ継続的に病院を訪問することにより、今までは見えなかった卒業生の生活や活動の実態も見えてくる。筋力低下からくる喪失体験の連続が無力感となり「どうせ」「べつに」と口にする回数が増えていく、卒業時に目標と掲げていた活動があっても、自分一人の意思では継続が難しく行為が成果となって結び付きづらいなどである。これらの現状を当事者及び彼らを取り巻く専門職種の方々と共有でき、情報交換が可能となったことは、協働支援体制の基盤づくりとして有効に作用した。

３　個別事例紹介

【事例１】

（１）対　象

Ａ氏　18歳（男性）　ＤＭＤ

在学中からパソコンに興味関心と適性あり。卒業

後の進路は一年契約の在宅ワーク。運動機能障がいは進行が遅く、自力筆記可能。

（2）経　緯（H18年3月）

・平成17昨年12月札幌チャレンジドより求人あり。主治医、本人、保護者、病棟関係者と協議し、1月に面接試験を受ける。1月末のカンファレンス、3月末のカンファレンスにて、在宅ワークを行うための支援について協議。4月から仕事の行程管理を進路担当が行うことを確認し、現在に至る。

・仕事は1年間という契約で開始。自分の力が発揮できる活動や仕事をしたいとの希望があり、在宅ワークもその1つと考えている。ホームページ（以後、ＨＰと記述）技術を身につけ卒業後生かしたいとの希望も持っている。

・ハーモニー活動（自治活動）へも関心あり。

・在学中のカンファレンスでは、目標をもつなどハングリー精神を養うこと、専門性を伸ばすことなどが話されている。

（3）現　状（H18年4月現在）

・月から金まで10：00～11：00作業訓練室にて在宅ワークを行っている。月400件のカテゴリ分けはペースをつかみ順調にこなせている。札幌チャレンジドとの連絡もメールを通し本人が行っている。給料は月3万円。7月から振り込まれる予定（札幌にいる保護者が管理）。

・ブログとＨＰづくり（未公開）は趣味として休日に行っている。

・開発した新スポーツ種目「スティックバスケ」を広げたいという希望を持っている。

・在宅ワークの目処が立ち、ペース配分ができるようになった6月から新たな活動（レクの企画）を開始した。

（4）課　題（ニーズ）

・在宅ワークが終了する1年後を見越し、次につながる支援の展開

→彼の能力を生かせる次の仕事や活動を探したり、ＨＰ技術や専門性を向上させる

・本人の心に寄り添い、ニーズを生み出す相談支援

→定期的かつ継続的な訪問の中で、本人のニーズを引き出しコーディネートする支援の展開（高等部進路担当・病院ＯＴ）

（5）卒業後の支援の開始

・就労支援については、高等部進路担当が窓口となり高等部の学習と関連させながら展開する（月・水・金10：00～11：00）。

・相談支援については、本人と活動を共有し話し合いを重ねながら支援する。

（6）卒業後の支援の展開

・4月当初、在宅ワークの行程管理として病棟及び作業訓練室に訪問し、ノルマ管理をサポートする（1日や1週間のペース配分、契約先との連絡方法、心理的なサポート含む）。約1ヶ月で仕事のペース配分を覚え適応可能となった。

・6月、契約先（札幌市）より仕事内容に関する説明会開催との連絡あり。自宅への帰省に伴いボランティア教員を募り参加する。

・8月、在宅ワーク終了後の活動を見越し、本人のニーズであるＨＰ技術向上のため情　報教育担当を支援者として派遣。8月後半、自分のＨＰをアップロードする。

・9月、本校及び千歳科学技術大学との業務提携で可能となったｅ－ラーニングシステムに興味を示しパスワードとＩＤを取得する。

・10月、就労への移行支援として名刺づくりの活動を開始する。

図7　Ａ氏の活動風景

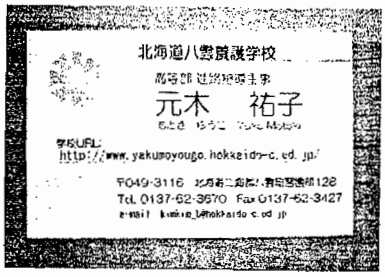


図8　Ａ氏作成による名刺

（7）事例のまとめ

4月当初は在宅ワークの行程管理が支援の中心であったが、定期的かつ継続的な訪 問を行い活動を共有することにより、本人から様々なニーズが生まれてきた。今後は名刺づくりの活動を通しコスト意識や納期設定及び仕事へ技術と質の向上を目指し、社会参加や就労に結びつくような就労への移行支援を展開する。

【事例2】

（1）対象

B氏　18歳（女性）　筋ジス患者（型は不明）

知的障がいと筋ジスを合わせもつ。場面かん黙であり、筆談によるコミュニケーション。電動車いす使用。卒業後の活動はパソコンや図書館利用を希望。

（2）経　緯

・姉妹が一緒にいられるとの理由から、継続療養を希望。
・卒業後の活動として、パソコン活動（インターネット、メール、キッズペイントなどのソフト）、数字への意識（日付、買い物、時計）、習字、図書館の利用などがあげられている。
・在学中のカンファレンスでは、インターネット使用にかかわるネチケット指導の必要性や「言葉」で伝えることの重要性などが話されている。

（3）現　状（H18年4月現在）

・4月「勉強したい。プリントください」というメールを自ら学校職員に送付。数学の学習プリントを開始する。
・5月の大型連休明けより3病棟を中心に活動プランを立て支援開始。（月～金：作業訓練室。木曜日のみ保育士と活動）
・本人の好きなことを探り、活動を支援したいという病棟のニーズあり。
・インターネット使用中。
・移動図書館車の利用希望。

（4）　課　題（ニーズ）

・本人が好きなこと、やりたいこと、得意なことを探り、自ら動き出せるような活動支援（コミュニケーション・社会参加含む）。
→定期的かつ継続的に活動を共有し、本人と信頼関係を築きながら支援を展開する。（高等部・病院ＯＴ）
・本人の心に寄り添い、ニーズを生み出す相談支援
→定期的かつ継続的な訪問の中で、本人のニーズを引き出しコーディネートする支援の展開（高等部進路担当・病院ＯＴ）

（5）卒業後の支援の開始

・活動支援については、作業療法室にて本人と活動を共有しながら支援する。（月・水・金10：00～11：00）
・相談支援のついては、本人と活動を共有し話し合いを重ねながら支援する。

（6）卒業後の支援の展開

・5月、本人のニーズである時計プリントから支援を開始。メールや文字で「○○したいよ」「○○おねがいします」と伝えてくる。
・6月、ＰＣによる学習を導入。インターネット上のフリー教材で学習する方法を獲得。
・8月、「学校へ行きたい」ニーズが出てくる。「たいこしたい」「たいいくかんボール」「外いく」「カメラしゃしん」など。活動自体より、コミュニケーションや遊びを欲している様子伺える。本人のニーズを尊重しつつ、消費行動ではなく活動を生み出す支援　を工夫する（写真やＶＴＲで記録を残し後日加工可能とする、コミュニケーションの課題を設けるなど）。

図9　文字による表現

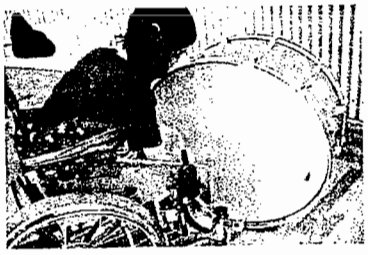


図10　太鼓をならす

・9月、興味関心が深かった「たいこ」の活動をヒントに、プレイステーションによる「太鼓の達人」を導入。ＯＴの支援でコントローラーを工夫し操作可能となる。クリア率の向上と共に集中率も加速する。

図11　コントローラーの工夫

・10月、「太鼓の達人」を通し、利用者とのコミュニケーション生まれてくる。

図12　文字版による会話

図13　２人で遊ぶ姿

（７）事例のまとめ

興味関心が広く好きなことがいろいろあるが、１つの活動への集中力が続かず「これ」といった活動が見いだせない状況であった。また、場面かん黙というコミュニケーションの課題があるため、活動自体よりも関係性に重点を置いた支援を展開することとした。定期的かつ継続的な訪問を行い活動を共有することにより、本人との関係性が深まり様々なコミュニケーションが可能となった（筆談、表情、リズム、サイン）。それに伴い、支援者を仲介して「学校」とつながろうとするニーズや、関係 性から発展した「あそび」へのニーズが生まれてきている。今後は、「あそび」をどう活動や社会参加に結びつけるかが移行支援の課題である。

【事例３】

（１）対　象

Ｃ氏　18歳（男子）　ＤＭＤ

卒業後の活動として「学びたい」意欲持っている。放送大学にて「国文学入門」を受講。電動車いす使用。日中呼吸器使用。

（２）経　緯

・卒業後も「学びたい」という意欲を持っている。具体的には、古文などの文学に関心があり、それに関連する放送大学の単位の受講を決めた。将来的には学士取得も視野に入れている。

・卒業時は、資格取得、漢字検定受験、公募活動（キャラクター・川柳）、物語作成などに取り組みたいとの希望あり。

・在学中のカンファレンスでは、やりたいことが生まれるかかわり、自分を表明する場の設定、自分の人生を積極的に考えていけるような支援などが話されている。

（３）現　状　（H18年４月現在）

・放送大学による国文学の講座を受講中。衛星放送の環境が整わずテキストで勉強中。（月～金10：00～11：00作業訓練室にて活動中）

・ハーモニーに所属。

・移動図書館車の利用希望。

・日中に呼吸器を使用中。

・公募活動は１度行った。

（４）課　題（ニーズ）

・「学び」を支える環境づくりと、本人が主体的に活動できるかかわりづくり

→「放送大学」という学習形態を支える環境作りに加え、学びをどう将来に結びつけるのか、という長期的ビジョンでの支援の展開。また、本人が主体的に活動できるための、かかわりづくりや環境づくりへの支援。（高等部・病院ＯＴ）

・本人の心に寄り添い、ニーズを生み出す相談支援

→定期的かつ継続的な訪問の中で、本人のニーズを引き出しコーディネートする支援の展開（高等部進路担当・病院ＯＴ）

（５）卒業後の支援の開始

・学びへの支援については、作業療法室にて本人と活動を共有しながら展開する。

・相談支援については、本人と活動を共有し話し合いを重ねながら支援する。

（６）卒業後の支援の展開

・４月、ＯＴ室で活動開始。放送大学で「国文学入門」を学ぶ。テキストによる学習方　法を選択し、ＰＣをノートとして学習する。京都で行われる新スポーツの表彰式に参加（ボランティア教員２名）。

・５月、ＯＴの依頼により、在学中の様子について学校関係者を招集し会議を開く。

・６月、学習方法への支援（能率、学習時間、試験対策、後期の受講科目など）

・７月、学習方法への支援（先輩の活用、テキストのデータ化、難解な漢字の読み：ウイキペディア検索、教科書のコピーなど）。前期試験実施

・８月、ＨＰ技術向上のため情報教育担当を支援者として派遣。８月後半、自分のＨＰをアップロードする。

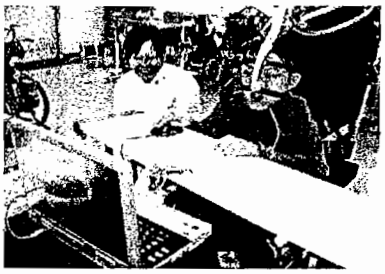


図14　Ｃ氏の学習風景

・９月、新たな学習方法として千歳未来技術大学のｅ－ラーニングシステム紹介（パスワードとＩＤを取得）。後期受講科目に「英語」「日本国憲法」「問題解決の～」を選択　する。

・10月、テキストとＰＣにて学習中

（７）事例のまとめ

本人のニーズは「学び」にあるが、観点が不明瞭な段階であった。そこで、放送大　学という学習形態を支える環境作りに加え、学びをどう将来に結びつけるのか、という長期的ビジョンによる支援を視野に入れ展開することとした。また、学習活動を通し、自分の置かれている学習環境を再評価したり、どうすればもっと良くなるかを考え、決定する一連のプロセスを支援するなど、本人が主体的に活動し周囲の環境を変えていけるための、かかわりや環境づくりへの支援も展開中である。

４　就労と社会参加の可能性

（１）コレクトスペースＳＵＮＳＵＮの誕生

「コレクトスペースＳＵＮＳＵＮ」は「アートと支援機器の情報発信」を合い言葉に、卒業生が様々な表現を発信できる場所として本校ＨＰ上に作成され情報発信ステーションである。支援機器を駆使して表現された個性豊かなイラストが多数公開され、Ｗｅｂ上での公開と同時に就労への可能性と社会参加（コミュニケーション）を念頭にイラストの受注も活動の範囲とした。

「コレクトスペースＳＵＮＳＵＮ」は個人の適性、興味関心に基づき各々が技術力及び質の向上を目指した「就労への移行支援」であり、就労と社会参加の可能性を念頭に置いた取り組みである。好きなことから始める、活動を通して個々の実態にあった方法で技術を身につける、ワークシェアリングの３つを柱に、様々な活動を展開中である。卒業生の活動が形となって目に見えることは、在校生と卒業生を結ぶ役割を果たし、進路選択の１つと成り得る取り組みである。一例として、在校生自らコレクトスペースＳＵＮＳＵＮの活動を見学に行ったり、卒業生から「もっとこんなことを勉強したい」というニーズが生まれてきている。

図15　秋の風（イラスト）

図15　第45回道病研交流会しおり

図17　校内展示

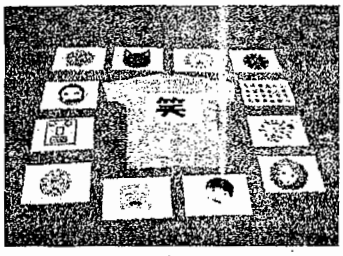


図18　学校祭　衣装イラスト募集

また、彼らが使用している様々な工夫や支援機器を当事者の立場で語ることができれば、その情報は貴重な財産として新たな就労の可能性に結びつくと考える。どのような支援機器を活用すれば活動に広がりを持たせられるのかという情報発信に加え、自分や障がいを客観視する目を養い、当事者として分析・評価・報告ができる力の育成を在学中から進めることが必要である。

図19　T氏と彼の支援機器

表9　コレクトスペースSUNSUN今年の取組み

6月	・学校便りイラスト作成、校章のデータ化
7月	・「卒業生と在校生のアートギャラリー」として本校ＨＰ上に公開 ・Ｗｅｂ上にてイラストの募集開始
9月	・「コレクトスペースＳＵＮＳＵＮ」と名前を変えリニューアルオープン ・八雲養護学校のコンテンツ上 http://www.yakumoyougo.hokkaido-c.ed.jp/ ・第45回北海道病弱虚弱教育研究大会交流会用しおりイラスト作成 ・第45回北海道病弱虚弱教育研究大会パネル展示 ・学校祭高等部Ｃ組劇「24分間ＴＶ～スマイル」テーマイラスト作成 ・学校祭高等部ＡＢ組「Water Boys ＋a girl」テーマイラスト作成 ・コンテスト形式によるイラスト作成
10月	・年賀状イラスト受注開始 ・名刺づくり受注開始 ・第28回　学校祭　パネル展示
11月	・卒業生と在校生のコンペディション ・イラストアート展開開催

5　ＨＰ制作技術の習得

重度の運動機能障がいを持つ生徒にとって、高等部教育というライフステージで何をどのように学ぶかは、将来への道を方向付ける貴重な3年間である。高等部では、「基礎学力の定着」と平行して「パソコンは彼らにとって必要な支援機器であり、ツールとして使いこなせる力が必要」との共通認識のもと、パソコン演習及び病院での現場実習を平成18年度に教育課程の中に盛り込んだ。

（1）パソコン演習

パソコン演習では、生徒個々の実態や興味関心に応じ、3つの内容を用意した。

- ＨＰづくり～情報の時間に学習済みである自校ＨＰづくりの経験や技術を活かし、道内のある団体のＨＰを作成する（受注）。
- イラストづくり～「フォトショップ」を使用し簡単なイラストづくりや写真加工の技術を身につける。
- ムービーづくり～「ムービーメーカ」を使用し、好きな曲に合わせた映像加工を行う。

何れの演習においても、興味関心を育みながら技術を身につけたり質を向上させることはもちろん、情報発信の観点から完成作品をＷｅｂ上に公開するところまでを学習の範囲とした。

演習を開始するに当たり、情報担当教諭のみではなく、関係する教師一人一人がパソコン技術を有する必要があった。そのため、情報担当教諭による学習会や、パソコン技術を有する外部講師に依頼し、技術指導を受けるなどの研修を行った。

（２）現場実習

卒業後の生活環境を想定し、在学中から具体的かつ体験的な学習が展開できないかと考えた。そこで今年度は、コレクトスペースＳＵＮＳＵＮが活動を展開している病院ＯＴ室を学習の場とし、在校生と卒業生が同じ場を共有できるような実習を計画した。これらの取り組みを通し、高等部で今後どのような教育課程を作りあげていくのかという見通しや、進路指導に関する課題の明確化、並びに卒業後の支援における次の展開が見えてくると期待している。

6　まとめと考察

（１）学校の役割と特別支援教育

卒業後の支援を展開する中で、当事者の方、病院関係者の方から聞こえてきた教育に関する生の声は、以下のとおりである。

- 卒業後を見越した進路指導や学習をしてほしい
- 在学時から、卒業後を想定した活動・演習に取り組む学習活動
- 進学、就労、活動に向けた具体的取り組みを在学中に行って欲しい
- 在学中に本人のモチベーションを高めること、伝達方法の確立
- 卒業生カンファレンス

卒業後の支援を展開しながら改めて感じたことは、「卒業後の支援」は卒業「後」始めるのではあまりにも遅すぎるというあたりまえの事実である。在学中の学習や進路指導の充実はもちろん、就労及び社会参加を念頭に置いた教育の展開が期待されている。さらに、重度の運動機能障がいを持つ児童生徒にとって、学校教育というライフステージで何をどのように教えていくのか、そして社会参加や就労を念頭においた教育課程をどのように作り上げていくのかを、学校関係者や保護者、病院関係職種が真剣に議論し、作りあげる時期にきていると考える。

（２）当事者の主体的活動を生み出す協働

卒業後の支援の展開を通し、当事者及び病院関係職種の方々と直接話をする機会を多く持つことができた。これからも児童生徒を中心に、学校関係者、保護者、病院関係職種が協働できる環境を大切にしていきたいと考える。児童生徒が自分の人生を主体的に選択し充実したものにできるか、さらに卒業後の就労や社会参加という観点を共有し、各々の立場や専門性を最大限生かした役割分担を明確にした協働をすすめることにより、当事者の主体的活動が生まれることを願ってやまない。

事例２　学校ＷＥＢページを活用した情報発信

1　実践の概要

筋力が徐々に衰えていくことによる手指機能の低下で、パソコンの操作には介助が必要であったり、キーボードやマウスなどの操作機器に工夫が必要であったりする。しかし本校児童生徒にとって、パソコンは生活していく上での道具として必要不可欠なものとなっている。これはインターネットを活用して、ＷＥＢページを閲覧、電子メール、チャット(音声・映像含む)など、情報やコミュニケーションの幅が格段に広げることができるためである。

そのような中で、学校ＷＥＢページをどのように活用していくかが課題になってきた。

2　実　践

（１）本校ＷＥＢページのリニューアル

本校児童生徒や保護者などが毎日見てくれるようなＷＥＢページにするにはどうしたらよいかをまず考えた。

まず、ＷＥＢページでは常に新しい情報を発信するように心がけた。古い情報では、また同じことが書いてあったとなると、次から見てもらうことができないと考え、更新もほぼ毎日するようにしたとこ

ろ、児童生徒も「今日はこんなことが書いてあったね。」などと毎日見てくれるようになった。

平成16年度に本校高等部と函館市にある「公立はこだて未来大学」が気象観測プロジェクト学習で協力関係にあったことから、WEBページ上にブラウザでカメラを動かすことができるお天気ネットワークカメラを大学のプロジェクト学習の一環で設置することができた。以前からお天気カメラを別ページで設置していたが、学校ＷＥＢページで常時見ることができることから、簡単に外に出られない人でもカメラを通して外の様子を知ることができるようになったことと、北海道以外の雪が降らない地域からもアクセスしていただき、「今、雪が降っていますね。」などと言っていただいたことがあり交流の広がりが期待できた。また、気温・湿度・気圧・風力・風速・降水量を測る簡易センサーをこれも大学のプロジェクト学習の一環で設置でき、ブラウザ上で表示する技術を教えていただいたことからトップページに常時表示することができた。とくに気温などは、他地域との差があったり、体感温度と実際の気温を比べることで内から外へ目を向けることにもつながったと考えている。

（２）併設病院との連携

併設の国立病院機構八雲病院の田中栄一作業療法士から、在校生と卒業生のコラボレーション「コレクトスペースSUNSUN」のページを学校WEBページ上に置くことができないかという相談をきっかけに、学校と病院の協働が一気に進みすぐに学校WEB上に公開できた。このコレクトスペースSUNSUNは、在校生と卒業生がパソコンなどを使い、イラストなどの作品を公開するスペースとして活用されている。

3　考　察

インターネット上では、常に新しい情報を発信していくことが重要である。古い情報では、間違いの元となるほか、常に新しい情報を探している閲覧者にとっては見向きもされなくなってしまう恐れがある。

本校WEBページでは、大学の協力で現在の様子をリアルタイムで見ることができるネットワークカメラの設置で動的なページにすることや、新しい情報をすぐに更新できる環境を校内外に整え、毎日見てもらえるようなページ作りを心がけることで、今まで知られていなかったことを発信し、本校教育に興味関心を持ってもらえるきっかけができていると考えられる。

「コレクトスペースSUNSUN」は、進路指導係とも協力して、卒業生と在校生の橋渡しとなるようにしていく必要がある。また、今後の展望としては、これらイラストの販売やコミュニケーションのスペースとしての活用ができればよいと考えている。現在までにひとことメッセージを受け付ける掲示板の設置やコレクトスペース宛てにメールが来たとき、関係者に自動的に配信されるメーリングリストの設置まで進んでいる。

北海道八雲養護学校公式ＷＥＢページ
http://www.yakumoyougo.hokkaido-c.ed.jp/
コレクトスペースＳＵＮＳＵＮ
http://www.yakumoyougo.hokkaido-c.ed.jp/museum/index.html

図19　北海道八雲養護学校公式ＷＥＢページ

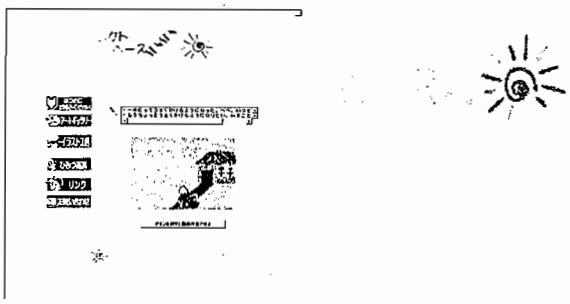


図20　コレクトスペースＳＵＮＳＵＮ

事例３　医教連携による安全な環境づくり

１　実践例の概要

校外に出る学習活動などでは、医療的ケアをうけている本校児童生徒の場合、活動に際し多くのリスクを伴う。そのリスクの軽減をはかり、児童生徒が安全に、且つ安心して活動できる学習環境を設定するため、学校と医療が協働し、様々な対応措置をとってきた。

今回は、本校の水泳活動に焦点を当て、学校と八雲病院とが協働し、リスクの軽減のために行ってきた事前研修を実践例として挙げたい。

２　実 践 例

（１）トランスファー（移動）研修

水泳活動で使用するプールが学校から1.2km程離れた町営の温水プールということで、活動に際し児童生徒の移動が伴う。タクシー（普通乗用車タイプ）、または福祉タクシーを使った移動を想定し、そのときに考えうる様々な移動介助やリスクへの対応について、八雲病院理学療法室長を講師に迎え研修を行った。

まず全体で、車いす、もしくはストレッチャーから座席への移動時における介助法や注意点などの研修が行われ、介助者の姿勢や手を置く位置、また介助者が１名の場合、複数名の場合の介助についても確認を行った。

その後、児童生徒個別の対応検討が各教師、ＰＴの間で行われ、児童生徒に応じた介助法、乗車時の姿勢、補助具の検討、確認が行われた。

（２）着替え研修

筋ジストロフィー児（以下筋ジス児）や脳性まひの場合、関節の可動域が狭くなっていることが多いため、着替え介助も児童生徒の実態に応じた対応、配慮が必要となる。その対応、配慮点を学ぶため、八雲病院の入浴日を利用し、実際に教師が担当する児童生徒の病棟に赴き、看護師から児童生徒個々の着替え時の介助方法や配慮点について研修し、確認を行った。

（３）実技指導研修

事前に水泳指導を担当する教師で、当日の活動プログラムを検討し、その上で実際に活動を行うプールに赴き実技研修を行った。スイマー（生徒）とヘルパー（教師）役に分かれ、入水から指導、退水までの流れを確認し、児童生徒個々人の実態に応じた対応や改善点などについて検討することができた。また、この研修には、八雲病院から２名のＰＴも参加し、平成１８年度の水泳活動より取り組み始めた「リハビリテーションの観点を取り入れた運動プログラムづくり」という視点から、様々なプログラムや動きについての意見交換も行うことができた。

（４）気道クリアランス研修

健常者であれば水泳活動中誤って水を飲んでしまったときも、咳など自力で体内から水を排出することが可能だが、筋ジス児の場合、呼吸筋の低下に伴い、咳の力も弱まり、うまく排出できないことが予想される。そのときのむせによる呼吸障がいを迅速に回避するための呼吸ケアとして、他力による排水法の研修を八雲病院医師、ＰＴ指導のもと行った。

まず、徒手による胸部圧迫の方法を習い、救急蘇生用バック（アンビューバック）と併用した蘇生法を研修することができた。

次に、徒手とイン・エクサフレーター（別名カフ・マシーン）を用いた機械的な排水介助法を習い、研修を積むことができた。

また、その場でも水泳活動時のプールサイドへのカフ・マシーンの携行も学校、医療スタッフの間で確認され、児童生徒の緊急時の対応に備えることもできた。

３　考　察

「トランスファー研修」では、事前に児童生徒個々の実態に応じた移動のシミュレーションができていたことで、移動時に考えられるリスクを把握することができ、適切な対応をとることができた。そのため当日もスムーズな移動および介助を行うことができ、児童生徒の安心感にもつながったのではないかと考える。実際、活動後にとったアンケートの中でも、移動時に不安を感じた児童生徒はいなかったと

いう結果がでている。

「着替え研修」では、担当する児童生徒の着替えを教師が事前に経験することができたことで、関節の可動域や着替えのこつなど身をもって知ることができ、当日も適切に介助にあたることができた。児童生徒においても、事前に着替えを介助してもらっている教師ということで、安心して着替えを依頼する様子も伺えた。

また、水泳活動当日は、病院から100枚以上のバスタオルを貸与してもらい、退水後の着替え等で活用することができた。

「実技研修」では、当日の活動シミュレーションや予想されるリスクの把握など、実際のプールを使って確認できたことで、当日も教師は余裕をもって指導にあたることができた。それは児童生徒の安心感にもつながり、意欲的、積極的な活動を引き出す要因にもなった。また、ＰＴと協働して行った「リハビリテーションの観点を取り入れた運動プログラムづくり」では、児童生徒の活動の幅を拡げただけでなく、今後の水泳活動の新たな可能性にもつながる取り組みになったのではないかと考える。

「気道クリアランス研修」では、水泳活動で予想される実際的な危険回避のための研修ということで、「安全な環境づくり」という点からは大変成果のある取り組みとなった。水泳活動に制限のあった児童生徒も、その活動にカフマシーンが携行でき、その使用方法や心肺蘇生法（ＣＰＲ）としてのムセに対応する技術を習得している教師がいることで、活動に参加できるケースも見られた。この研修を行ったことで、児童生徒の活動範囲の拡大にもつながり、内容も高める結果となった。

上記の通り、学校と八雲病院が協働して取り組んだ事前研修は、安全な環境づくりにおいて大きな成果を上げただけでなく、生徒の安心感、また活動の幅を拡げる結果にもつながっている。

また、これら一連の取り組みの成果としては、学校、医療側が活動の意義や目的、教育的な効果を互いに理解したうえで、その活動に伴うリスクを共有できたことも挙げられる。これまでの学校教育活動では、学校が主体となって活動内容を検討し、それに伴うリスクについても学校独自の軽減措置がとられ、それを医療側に伺うという手法がとられてきた。ＩＣＦの理念が一般的になると、学校側、医療側が同じ目標、目的を共有し、その目標の達成を阻害している様々な障壁（リスク）をそれぞれ専門的な立場から協議し、取り除いていこうという考え方がなされるようになってきた。そのような実践が児童生徒の安全な環境づくりにつながり、結果としては活動機会の増大や活動範囲の拡大、活動内容の向上にもつながったのではないかと考える。

今回は水泳活動に焦点を当て、実践例として挙げてきたが、学校と医療が協働した取り組みは、校外学習や修学旅行などでも行われ、児童生徒の安全環境の向上、そして活動の拡大につながっている。今後も学校、医療が協働した児童生徒のさらなる安全環境づくりを推進していくことで、活動の拡大がはかられ、児童生徒のより一層成長につながることが望まれる。

事例４　双方向の支援　北海道留寿都高等学校との交流を通して

１　交流の概要

養護学校と一般の高校との交流学習の一事例である。双方のニーズをマッチさせることができれば、障がい者が健常者に一方的に世話になるといった交流ではなく、お互いがセルフエスティームを育んだり、進路を考えたりできる双方向の支援につながる交流ができるのではと考え、留寿都高校の担当者と双方向の支援で一致し、企画を進めた。留寿都高等学校と本校の交流のコンセプトは対等の交流とし、農業福祉科と病弱養護学校である各学校の特徴を活かすこと、相手を活かすことを目指した交流を始めた。具体的には留寿都高校は農業と福祉に関する専門性を活かし、八雲養護学校の花壇整備や八雲養護学校の生徒が花を植えることが可能になるような工夫をした。また、交流学習がきっかけで、参加生徒一名が併設する八雲病院で職場体験実習を行い、お互いの生徒が進路に対する意識を高めあった。八雲養護学校は、花や野菜の管理や利用方法を自分たち

の視点で進めた。

2　北海道留寿都高校との交流に至る経緯

・平成15年に北海道伊達高等養護学校と本校が「ひまわりの交流」（本校ＨＰ参照）をし、卒業式には花を飾るなどの協力をしていただいたがその交流を担当した鈴木尚教諭が、平成16年に北海道留寿都高校に異動された。
・平成１７年に北海道留寿都高校から、花の苗をいただき、本校の「花いっぱい運動」に活用した。現在もベコニアの花は高等部に開花中である。
・その年は高等部生徒会機関誌交流も実施した。
・ 平成18年度には正式に交流を深めることとし、両校の校長間で確認が行われた。

3　両校が期待する交流の意義

農業系の高校としては全国唯一の「農業福祉科」を置く学校である北海道留寿都高等学校と、北海道に3校しかない病弱養護学校である本校が交流を深めることが、両校の生徒にとってどうような効果や意義が期待できるのかを確認しあった。

【八雲養護学校生徒における効果や意義】

① 介護福祉士などの道を歩む同世代の友人と友情を育むことができる
② 対等の交流を経験した上で、介護者と非介護者の体験ができる。
③ 自己の存在意義を体験できる機会となりうる。
④ 病弱養護学校と福祉コースを持つ高校との連携は、特別支援教育学校としての役割をはたす。

【留寿都高校の生徒における効果や意義】

① 農業福祉科で学んだことの実践の場になる。
② 対等の交流を経験した上で、介護者と非介助者の体験ができる。
③ 自己の存在意義を体験できる機会となりうる。
④ 職業選択の一つの体験になりうること。

上記の理由などにより、交流を深めることは、両校にとって相互に教育効果が高く、両校の生徒のためになり、また本校にとっては、特別支援学校としての役割を果たすことにもつながり、かつ留寿都高校においても全国で唯一の農業福祉科の特色を生かすことができることが期待される。よって本計画を推進した。

4　実践の経過

（1）移動式花壇の制作と花壇の企画造成

留寿都高校では農業と福祉に関する専門性を活かし、車いすでも花の苗を植えることができるようにと、レイズトベッドという移動式花壇を制作した。また、八雲養護学校の花壇の希望などを考慮し、花壇や畑をベジタブルガーデンするようにレイアウトの工夫と移植する植物の育成に努めた。

（2）交流会当日

5月　日の交流会にその移動式花壇と育てた花と野菜の苗をもって2年生　名、引率教員3名で来校した。本校の体育館で本校生徒が花の苗の移植する作業を留寿都高校生徒が日ごろの専門性を生かし、八雲養護学校の生徒にアドバイスした結果、本校の生徒がほぼ自力または一緒に作業をして花の苗の移植をすることができた。また、両校の生徒がペアになり、枝豆をポットに播種した。さらに、交流会終了後に花壇造成の指示を本校職員に出しながら花壇作りも取り組んでくれた。

（3）交流会後の状況

交流会の成果は、その後も以下にあるような形で実を結んでいる。

・交流会後、両校の個人間でパソコンメールでのやりとりなどが続いている。
・八雲養護学校では交流会で一緒に植えた枝豆を育成、収穫し、本校職員向けに販売学習を実施した。また、虫に食べられた白菜を廃棄せずに、きちんと処理をしてキムチにして留寿都高校に送った。
・留寿都高校の交流会参加生徒1名が、併設の八雲病院で9月9日～13日の1週間施設実習を実施した。
・10月29日　本校の学校祭に、休日を利用して自主的に生徒が4名、教員3名参加した。また留寿都高校で育成した菊の販売を共同で販売した。
・12月1日留寿都高校で、移動式花壇の成果と八雲養護学校との交流について学内発表を行った。

5　考　察

北海道留寿都高校は札幌を中心とする石狩地方に隣接する留寿都村にある一間口の農業福祉学科の学校であり、半数以上の生徒が寄宿舎での生活となっている。同校教諭によると、明確な意識を持たずに、偏差値などの問題で入学してくる生徒も少なからずいる。両校交流のコンセプトは対等の交流とし、自己の特徴を活かし、相手を活かす交流を目指すことで一致し、交流を始めた。

留寿都高校では、農業福祉の知識や経験を生かし、苦心して移動式花壇を制作した。それを実際に交流会で使い、そのおかげで本校の生徒が当日の悪天候にもかかわらず体育館で花の苗を植えることができた。その事実こそが農業福祉を学ぶことで自分は何ができるのだろうかという留寿都高校生の疑問に対する明快な答えであった。移動式花壇によって、花の移植ができるようになったり、専門知識を生かした花の植え方のアドバイスしたりすることで目の前の障がいのある方々が農業に親しむことができている。この成功体験が留寿都高校の生徒にとってもセレフエスティームを育むことにつながり、その実感が留寿都高校の生徒から教師向けと生徒宛にいただいた手紙に表現されていた。また、平成17年6月1日に留寿都高校から本校にいただいたベコニアが現在も教室で育ち、2年半に渡って花が咲き続け、その大きさは50cm以上に育っている。寿都高校の生徒からは実習で何千という種の播種、育苗をする中で、届けた先で大切に育てられているのをみて、うれしさと驚きの声がたくさん聞かれた。自分が何気なくやっている実習の成果が、場所を変えたところで大切にされていることを知り、自己の仕事の重要性や社会貢献していることを自然と学ぶことができたようである。

交流会で一緒に播種した枝豆を本校の生徒と教員が管理、育成に努め、2回に分けて収穫、販売した。本校生徒にとって生まれて初めての販売学習であったので、これも貴重な体験となった。

なお、本校の花壇は八雲町の花いっぱい運動コンクールにて、優秀賞に輝いた。優秀賞に輝いたのは、本校にとっての初めてのことであり、表彰式に生徒会長が出席し、表彰されるなどセルフエスティームを育むことにつながった事例ある。(資料②)

また、交流会を体験した一名の女子生徒が八雲病院での実習を自ら希望し実現したことは、当該生徒にとっても貴重であったが、本校の生徒にとっても同世代の友達の就業体験をかい間見ることになり、進路を真剣に考える絶好の機会であった。介助する者とされる者という間に友情が存在する体験も重要な経験であったのではないだろうか。

事例5　支援技術の学習と多職種の支援

1　実践の概要

喪失体験の多いＤＭＤ生徒が主体的に活動するためには、生徒が活動できる環境を教師側で設定し、生徒自身がセルフエスティームを感じることができる学習が重要である。また、ＤＭＤ患者の寿命が改善され、学校でも人生を充実させ、将来につながる学習が必要となっている。

セルフエスティームを感じつつ将来につながる学習の一つとして支援技術（Assistive Technology）が考えられる。

筋ジス児は日常から支援技術を利用する立場にあり、支援技術に対する関心は極めて高い。実際に支援技術を利用する当事者としての視点やニーズもあり、支援技術を学習することは自らのＱＯＬの向上につながる。また、支援技術を知り具体的に活用することにより様々な活動が可能となり、障がいのない人と同様か、時にはそれ以上の活動ができる可能性がある。環境さえ整えば支援技術を利用し、社会へ貢献することも可能である。

このような筋ジス児が支援技術を学ぶ意義をふまえ、支援技術と自らの生活や将来を関連づけ、自分たちで考えて学習を進めていくことを目標に総合的な学習の時間で行うこととした。

様々な関係機関と連携し、支援技術を高等部在学中から学習することで、障がいのある当事者として自分たちで確かな情報を発信し、将来的には社会に貢献することを目指す。

2　実　践

（1）総合的な学習の時間の取り組み

実践は平成18年4月から始め、単年度で区切って学習することとした。DMD生徒が支援技術を学ぶ意義をふまえ、今年度は、以下の4点を目標とした。

① 支援技術の専門家や関係者の講義を聞く機会を設定し、様々な視点から支援技術を学ぶ。
② 支援技術を学習することが自らのQOLの向上につながることを理解する。
③ 支援技術を学習することで自らが社会貢献や社会参加につながる可能性があることを理解する。
④ 支援技術を学んだことを活かして、自分のニーズに合った福祉支援機器を製作する。

学習を進める上で積極的に支援技術の専門家や保護者、病院OTなどに協力してもらい、様々な立場からの専門的な支援技術の話を聞く機会を設定した。実際の指導では身近な福祉支援機器を知るところから始め、2学期に入り支援技術の可能性について考えた。後半は生徒自身のQOLを高める福祉支援機器を製作する予定である。（具体的な指導内容については表10を参照。）

表10　総合的な学習の時間の年間指導内容

4	・福祉支援機器について意識する。
5	・生徒と福祉支援機器の関係を理解する。
6	・中邑教授の支援技術の講義を聞く。 ・身の回りの福祉支援機器を調査する。
7	・在校生祖父の福祉支援機器の開発の話を聞く。
8	・様々な福祉支援機器の調査をする。
9	・様々な福祉支援機器の調査をする。 ・様々な福祉支援機器の調査をする。
10	・支援技術について知る。 ・支援技術について知る。 ・福祉支援機器を学ぶ意義を確認する。 ・学校祭中間発表
12	・私の福祉支援機器をつくる。 （適時OTのアドバイスを受ける）
1	・私の福祉支援機器をつくる。 （適時OTのアドバイスを受ける） ・私の福祉支援機器をつくる。 （適時OTのアドバイスを受ける）
2	・福祉支援機器の品評会を行う。
3	・中邑教授の支援技術の講義を聞く。 ・学習のまとめ ・学習のまとめの発表

（2）東京大学との連携

平成18年5月17日、東京大学最先端科学技研究センターの中邑賢龍教授を講師として支援技術に関する講義を受けた。この講義は、平成18年度文部科学省の「ATに関する知識を持った当事者支援プログラムの開発」の研究の一環として行われたものである。

講演内容は、支援技術の概要や実際の福祉支援機器の説明、支援技術を利用する当事者が意見を発することの重要性や当事者が発する情報の様々な可能性などであった。普段聞くことのできない専門家の話を聞き、生徒たちは身の回りの支援技術に関して改めて関心を持つようになった。

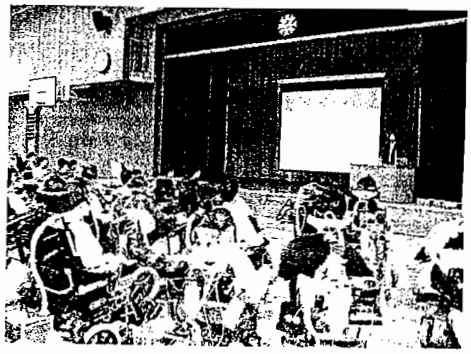


図21　支援技術講習会の様子

（3）保護者との連携

平成18年6月28日、本校在校生の祖父を招いて実際の福祉支援機器の開発について話を聞いた。車いすを利用する孫を考えて製作したトイレ介助のためのいすや雪上を移動するためのそりなどの実際の福祉支援機器について発想から完成までの流れと工夫した点について詳しい説明を受けた。

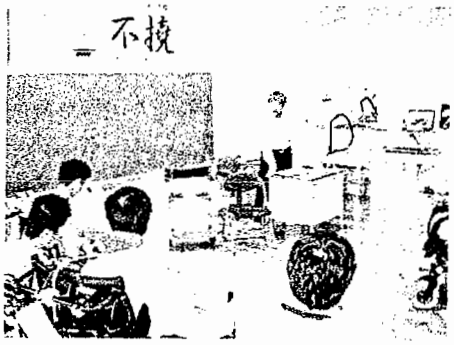


図22　祖父の話の様子

（4）ＯＴとの連携

平成18年10月より、病院ＯＴの協力で、教師向けの支援技術の学習会を行っている。生徒により、具体的な支援技術を伝えるために、コミュニケーション、運動バランス、スイッチの製作など支援技術の様々な知識や考え方、実際の使い方などを学習し、生徒の指導へと還元している。

図23　ＯＴとの学習会

3　実践の成果

実践の成果として、今年度高等部に入学した１年生の卒業後の活動に対する意識の変化を取り上げる。

対象生徒の疾患は、ＤＭＤであり普通科の教育課程で学習している。４月と７月に卒業後の活動（進路希望）に対するアンケート調査を行った。10月には学校祭の中間発表にむけて支援技術の学習を振り返るアンケートを実施し、その中の質問で、卒業後の活動について記述する項目を設定した。

入学した４月当初の卒業後の希望は、「絵が好きなため卒業後は通信教育などを受けて、将来はデザイナーになりたい。」「みんなの役に立つ仕事がしたい」と漠然としていた。

しかし、東京大学中邑教授の講義や保護者の実際の福祉支援機器開発の話を聞いた後の７月の調査では、「自分自身で、福祉支援機器のデザインや製作をしたい。」「同じ障がいを持つ人の困っている事をまとめて僕はこういうものを作ったらいいと　提案して会社を興してみたい。」と意識の変化が表れ始めた。

さらに学習を進め、10月のアンケートでは、「車いすに乗っている人がどのくらいでバッテリーがなくなるか（車いす利用者としての視点）が今後必要になる。」「支援技術を学ぶことによって様々な意見を持つことができる。そして、気がついたことを伝えていくことが大切になる。」「支援技術を勉強することにより私の生活の質が良くなる。」「みんなの生活が楽になるよう、同じ病気の人たちの意見を聞いて支援機器をつくる会社に伝えたい。」などの記述が見られた。生徒自身が支援技術を学ぶ意義や当事者としての視点を発信することの重要性に気づき、将来の生活や社会への貢献の可能性を意識することができるようになったと考えられる。

表11　生徒の意識の変化

月	将来に向けての考え
4	・大学で勉強しデザイナーになりたい。 ・みんなの役に立つ仕事がしたい。
7	・福祉支援機器を作りたい。 ・福祉支援機器をデザインしたい。 ・同じ障がいを持つ人の困っている事をまとめて僕はこういうものを作ったらいいと提案して 会社を興してみたい。
10	・車いすに乗っている人がどのくらいでバッテリーがなくなるか（車いす利用者としての視点）が今後必要になる。 ・支援技術を学ぶことによって様々な意見を持つことができる。そして、気がついたことを伝えていくことが大切になる。 ・支援技術を勉強することにより私の生活の質が良くなる。 ・みんなの生活が楽になるよう、同じ病気の人たちの意見を聞いて支援機器をつくる会社に伝えたい。

5　考　察

実践の結果、対象のＤＭＤ生徒は支援技術を自らの生活や将来と関連づけて考え、卒業後は当事者としてニーズや支援技術のアイディアを発信しようと考えるようになった。

特に成果として大きいことは、支援技術を学ぶことで、障がいがある当事者だからこそ発信できるニーズやアイディアがあることに生徒自身が気づき、それを世の中の同じような障がいのある人や、支援技術を必要とする高齢者に還元したいと考えるようになったことである。

支援技術の学習を通して、生徒自身が自分でできる社会貢献の可能性に気づくことができた。これは、

自分の存在価値に気づいたということであり、セルフエスティームを育成する第一歩である。将来的には実際に活動を行い社会貢献する中で、セルフエスティームを自ら引き上げていくことができるようになってほしい。

今後は、生徒が確かな情報として価値あるニーズやアイディアを発信できるよう、実態に合わせた学習環境の設定や支援を行うと共に、卒業後実際にニーズやアイディアを発信できるような組織やシステムを学校及び八雲病院関係者等の他職種連携を活用して構築する必要がある。

第４章　研究のまとめ

近年の専門医療の進歩（非侵襲的人工呼吸や心保護治療など）に伴い、小児期発症の難病である筋ジストロフィー患者の生命予後は５年から10年以上改善されてきた。そのことから、患者自らが人生を主体的に選択し、充実したものにできるようにセルフエスティーム（自分にもできるという自己肯定感）を育む教育の実践が重要になってきている。

学校、医療機関、福祉機関それぞれが個別に対応していては、筋ジス患者の寿命延長がもたらした卒業後を見越した教育の充実、進路指導、卒業後の支援、生涯スポーツなど筋ジス患者のＱＯＬの向上に直結するニーズを満たすという課題を解決するための方法を見つけ出すことは難しい。今までは、就労の場の確保、教育課程の対応、社会ニーズと患者のニーズの把握、患者のセルフエスティームの育成など、それぞれが各々パーツに分けられて段階的に取り組みがなされてきた。つまり各機関各々の思いはあるものの独自で動いた結果は、支援する側にとって都合の良い形をとることになってしまっていた。病弱養護学校をはじめとし、保護者・教育機関・医療機関・福祉機関によるこれまでの連携は、筋ジス児を取り巻く環境全体をトータルで考えるまでに至らなかったのである。

そこで本校では、平成１７年度からセルフエスティームを育むために本邦の養護学校ではほとんど取り組まれていなかったハロウィック水泳活動を行い、児童生徒が入院している八雲病院や八雲町教育委員会をはじめとした地域関係機関との連携・協力を大きく発展させてきているところである。

特に高等部卒業後も八雲病院での継続療養をほとんどの生徒が選択する現状にあっては、八雲病院との連携・協力は本校児童生徒の生活全般に及ぶ支援をする上で欠くことのできないことである。

本研究では、単に学校が行う活動に対して医療の側からの協力を求めるという一方通行の連携・協力ではなく、八雲病院に入院する筋ジス児を中心にし、一人一人の可能性を伸ばし学校教育修了後の活動までを視野に入れて教育と医療がどのように連携すべきなのかを具体的な取組を通して考察している。まだ始まったばかりの段階であり、どの取組も事例の範囲を超えるものではないが、学校と病院が併設していることの利点を生かしたこの取組を筋ジス児にとってよりよい未来を創造するモデルとして全国に発信していきたいと考えている。

筋ジストロフィーという疾患は、小児期発症の慢性疾患であり、専門医による診断と、それに基づいた生涯の発達を見通した継続的な教育実践が必要となる。それゆえに本研究の「環境を整える」条件作りが重要である。本校の生徒は筋ジストロフィーという疾患にもかかわらず、きちんとした環境をつくることによって、度重なる喪失体験に負けず、セルフエスティームを育むことができることを実証してくれた。またそれだけでなく、彼らの頑張りが支援する側のセルフエスティームを育んでいくことを教えてくれた。そのための環境作りには、多くの方の協働とご助力を得てきている。

なかでもこの研究の機会を与えてくださった(財)障害児教育財団、(財)みずほ教育福祉財団に厚くお礼を申し上げる。また国立特殊教育総合研究所　上席統括研究員　西牧謙吾先生、主任研究員　滝川国芳先生、太陽の門・施設長の河原仁志先生、八雲病院小児科の石川悠加医長、山下信子看護師長、三浦利彦理学療法室長、田中栄一作業療法士、ＨＯＰの竹田保代表、留寿都高校の鈴木尚教諭、東京大学中邑賢龍教授、ハロウィック水泳法協会の芝田徳三先生、江上潤子さん、川面幸男さん、野村和形さん、

ハロウィック協会理事で広島県三原市の阿部真理子さん、川代義夫八雲町長、岩村吉男八雲町教育委員会教育長を始め、その他、関係諸機関の皆様にあらためて感謝の意を表したい。

執筆者

教頭　長谷川和之
教諭　池田　哲也　野本　雅明　元木　祐子
小森　信幸　土屋　和彦

引用文献

・養護学校における水泳指導への取り組み（2005）池田哲也　石塚昌二　野本雅明（他）
・筋ジストロフィーのケアシステムとＱＯＬ向上に関する総合的研究（平成14～16年度総括研究報告書）290-291　福永秀敏

参考文献

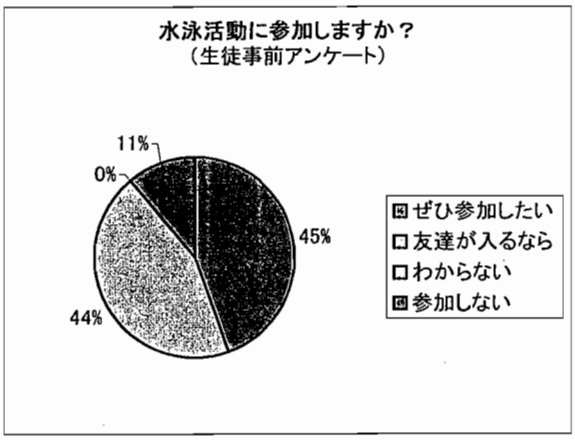
・挑戦しようスポーツに（2002）社団法人　日本筋ジストロフィー協会
・ICF活用の試み（2005）ジアース出版
・個別の教育支援計画ガイドブック（2006）全国心身障害児福祉財団
・筋ジストロフィー教育のあゆみ（2000）日本筋ジストロフィー協会
・非侵襲的人工呼吸療法ケアマニュアル（2004）日本プランニングセンター

資料1

水泳活動アンケート結果

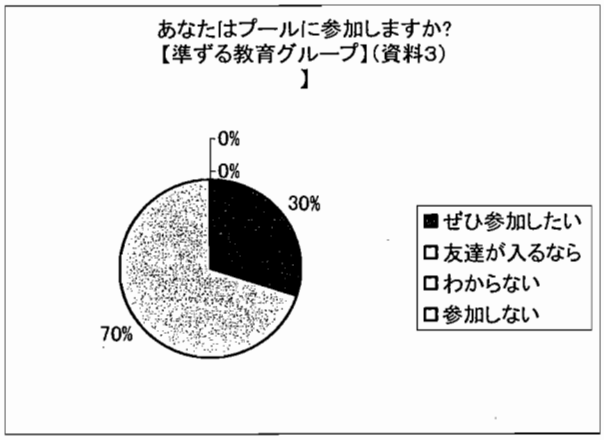
資料１　平成１７～１８年度　水泳活動アンケート結果

□平成１７年度プール学習事前アンケート結果
質問：７月２８日のプール活動に参加したいですか?

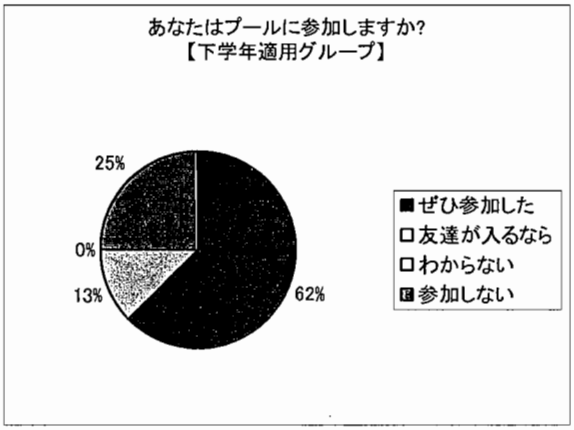


ぜひ参加したい	友達が入るなら	わからない	参加しない
8	8	0	2

ぜひ参加したい　8名（準ずる４／１３名　合わせた指導４／５名）
友達が入るなら　8名（準ずる７／１３名　合わせた指導１／５名））
わからない　0名



参加しない２名（合わせた指導２／２名）



不参加の理由：不安　２／２名

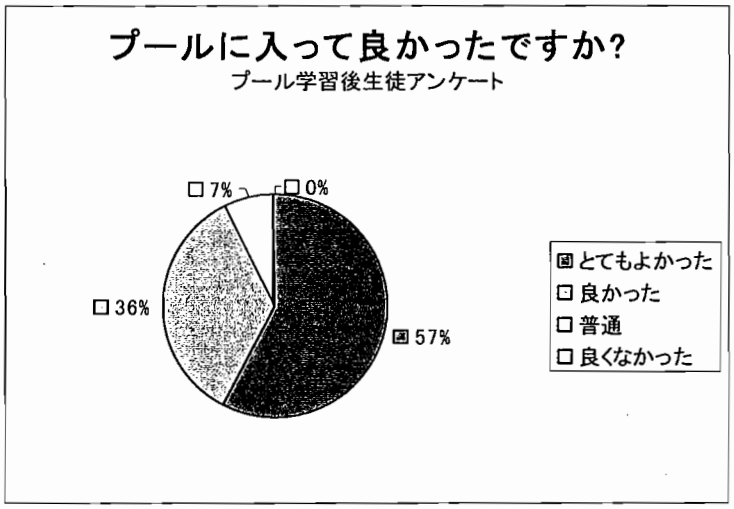
2に該当（保護者）

ぜひ参加したい	友達が入るなら	わからない	参加しない
4	0	2	3

（後日に保護者から参加希望）

□平成１７年度プール学習事後アンケート結果

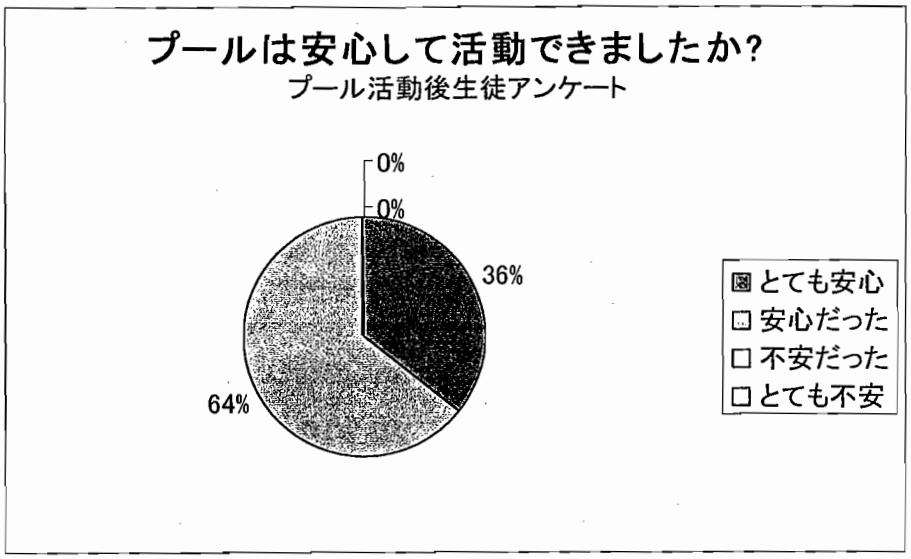
質問１：プールに入って良かったですか?



選択群	理　　由
とても良かった 8名	・ 泳げたことで良かった。 ・ プールで自由に動けて楽しかった。 ・ はいったことがあるから ・ プールの中が気持ちよかったことです。 ・ ４年ぶりにはいいたので、どんな感じになるのかとても楽しみにしていて、やってみると泳いだり、浮いたりすることを自分でやれてよかった。 ・ 先生がしっかりと介助してくれたので、普段あまりできないことを体験をより楽しむことができたから。 ・ 楽しくプールに入ることができてよかった。
良かった 5名	・ 楽しかったのでよかったです。 ・ 泳げれたから良かったです。 ・ 体が浮いて楽しかった。 ・ 楽しかったから ・ プールに入ったのは３年ぶりなので楽しかったです。
普　通 1名	・ なんとなく普通だった
良くなかった 0名	

１４名中の１４名の回答　　本人記入（DMD１３名　FUMD１名）

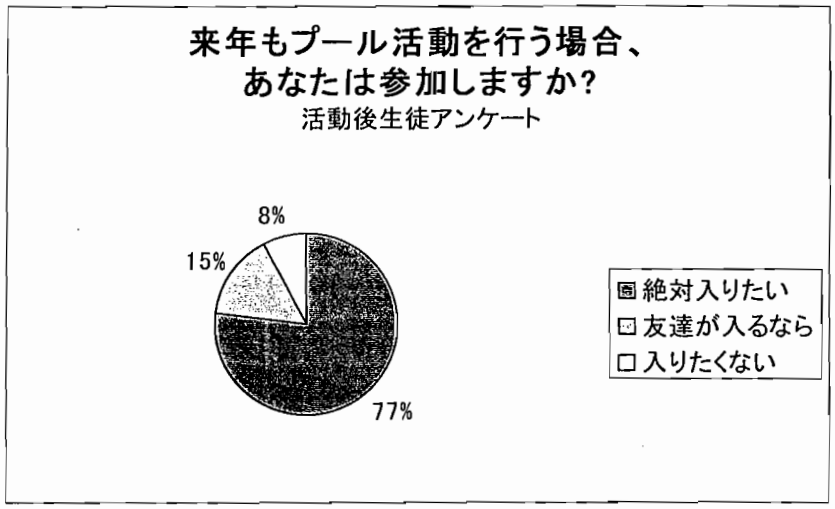
質問２：プールは安心して活動できましたか?



選択群	理　　由
とても安心 5名	・　しっかりとおさえてくれていたので安心だった。 ・　先生がちゃんと介助してくれた。 ・　たのしかった。 ・　安心して楽しくできました。 ・　話しかけながら活動していたところが良かった。 理由未記入１名
安心だった 9名	・　水に浮くのに苦労しなかった。また思ったよりこわくなかった。 ・　思った以上に安全だった。 ・　女の先生でしたが、水の中では浮力が働くので十分に支えられるんだと安心してできました。 ・　先生が支えてくれていたから。 ・　危険だと思われるところがなかった。 ・　先生が支えていたから安心だった。 ・　最初は少し不安だったけど安心して楽しく活動することができた。 ・　安心して、楽しくできました。 理由未記入１名
不安だった 0名	
良くなかった 0名	

１４名中の１４名の回答　　本人記入（DMD１３名　FUMD１名）

質問：　来年もプール活動を行う場合、あなたは参加しますか?

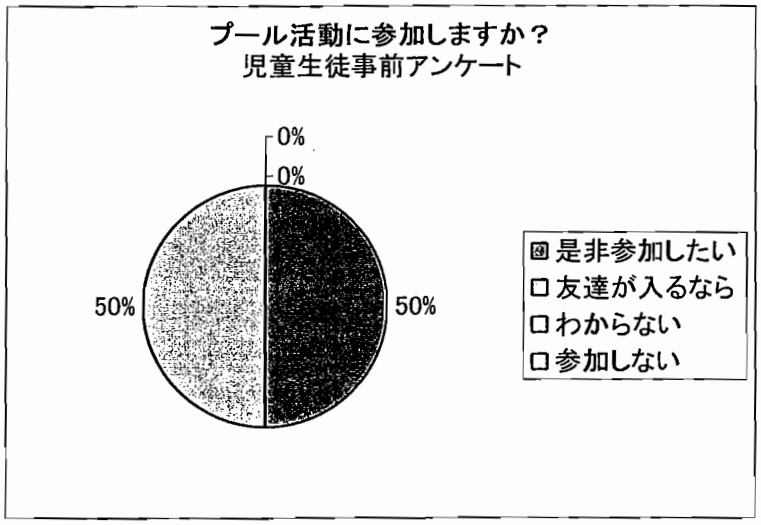


絶対入りたい	友達が入るなら	入りたくない
１０名	3名	1名

１４名中の１４名の回答　　本人記入（DMD１３名　ＦCMD１名）

□プール学習を行った児童生徒 14 名についての事前アンケート

質問：　７月２８日のプール活動に参加したいですか？



ぜひ参加したい	友達が入るなら	わからない	入りたくない
7名	7名	0名	0名

１４名中の１４名の回答　　本人記入（DMD１３名　ＦCMD１名）

質問８：　プール活動全体を通して思ったこと、感じたことを書いてください。

- 楽しかった。もっと入りたかった。
- 楽しくプール活動ができてよかった。
- ジャンケン列車がはずかしかったけど、やっているうちに楽しく思えてきた。背泳ぎをしたことが楽しかった。
- プールの中で泳いだり、じゃんけんをしたのが楽しかったです。
- 気持ちよかった。
- もう少し、プールに入っていたかった。来年は時間を多くとってほしい。
- 来年は違うものをやってみたい（ジャンケン列車も良かったけど）。ストッレチャーとタクシーを使った送迎は意外に良かったです。プールをサマースクールに取り入れてもいいと思う。潜ってみたかった。
- プールに入る時間はちょうど良かった。
- もっと時間があれば良かったと思った。
- 温室の温水が程よく、心臓に負担がかからず、快適に活動できました。良かったです。
- ビデオで見たよりも恐ろしさなどが全くなく、スムーズにプール活動に参加することができた。
- 特になかった。
- なし。

未記入１名

質問３：プールに入って学んだことは、気づいたことは何ですか?

- 水の中では良く動けること
- なんとなく日ごろ、使わない筋肉を使った気がする。
- らくにおよげた。
- 水の中では地面にいるときよりの良く動けること。足を良く動かせた。足が浮いて全体的に浮けた。
- 誰でも泳げること。
- 自分の力で進めることがわかった。
- 足が思うように動く。
- プールに入ることが楽しいことに気づいた。
- ぬまくないうれしかった。（ぬまくない→ヘルパーをした教員の名前）
- 更衣室が暑かった。
- 特になかった。
- 未記入３名

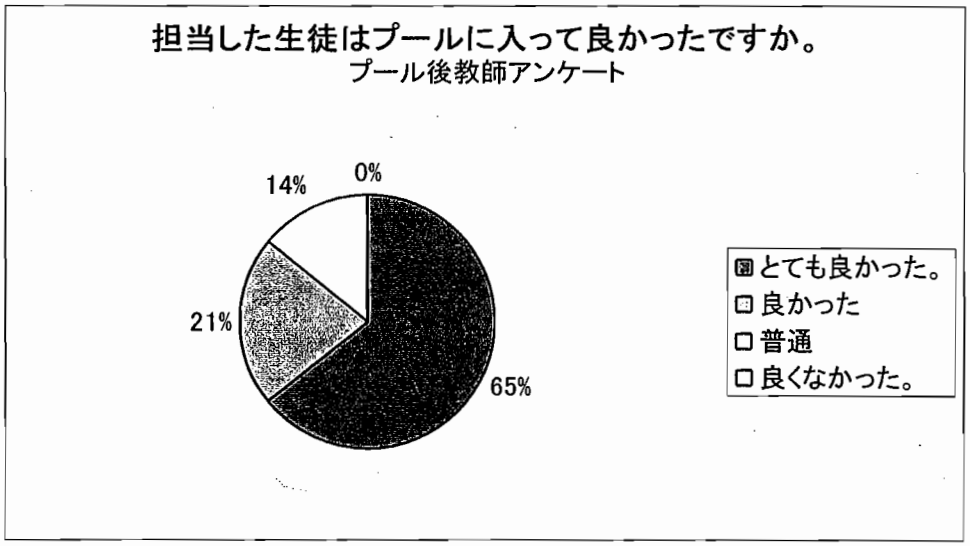
１４名中の１４名の回答　　本人記入（DMD１３名　ＦCMD１名）

質問４：　八雲町のプールの印象を教えてください。

- きれい、ひろい
- 思ったより広くてきれいだった。
- すごかった。
- 使いやすかった。
- 広いと思いました。
- とても大きくて、泳ぎやすかったです。
- きれいだった。
- あお向けになると印象的だった。
- きれいなプールだった。
- 更衣室が広く、使いやすかった。車いすの設備が良くできていた。プールが広かったし、車椅子のまま入れる設備が良かった。
- 新しくてきれいだった。通路が狭いところがあった。
- プールはきれいで、広くて誰でも入れそうだった。
- 広くて使いやすそう。
- プールが広くて、きれいだった。

□平成１７年度プール学習事後ヘルパー教員アンケート

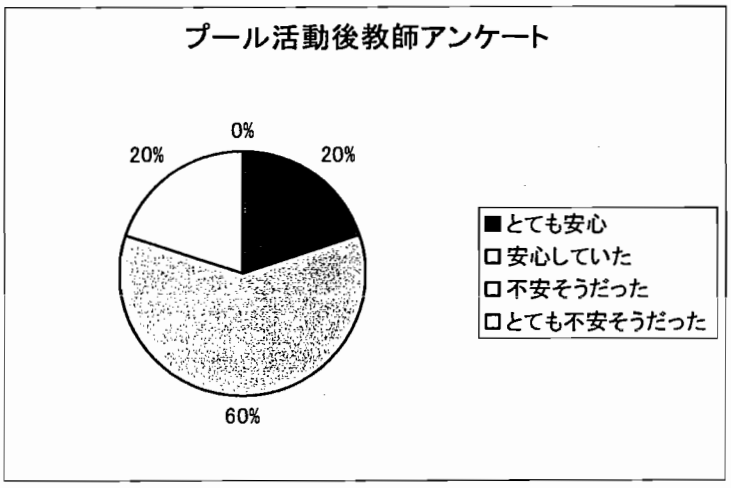
質問１：担当した児童生徒はプールに入ってよかったと思いますか。（省略）



選択群	理　　由
とても良かった １３名 筋ジス担当 ９名	・入水後は「ちょっと怖いです」と言っていたが、後に水に慣れてくると自ら手を動かしたり、足を動かしたりしていた。最初は「足を動かせるかい?」と聞かれると「できない。」と言っていたが、「できた。動いたー」と嬉しそうにしていた。 ・足を動かしたり、手を動かしたり、友達と楽しく活動していたから。 ・終始笑顔で、「楽しい」と言っていた。また絶対に入りたいと言っていた。 ・入る当初はかなり不安で、あまり入りたくないようだった。入ってから慣れていき、最終的には口あたりまで潜ることができた。 ・プール活動があると聞いてから、ずっと楽しみにしていた。入るときには少し緊張したようだが、慣れてくるとニコニコしていた。 ・入水した時に、言葉では色々言っていたが、とてもニコニコしていた。 ・最後に「またプールに入りたい。」と言っていた。その言葉からもわかる通り、次に希望のもてる活動であったと思われるから。 ・最初は怖がる様子も見せたが、水に慣れてくると笑顔が多くなり、最後には「またやりたい」といっていた。 ・入水時は緊張したが、入水後は水の感覚を楽しんでいた。プールに入ったと言う経験も自信につながるように感じた、後半の表情は特に良かった。

	・ 笑顔がたくさん見られたこと。高３で最後の機会に貴重な体験ができたこと。安全に入ることができたこと（重心担当） ・ 普段、体の緊張が強く自由に動かすことが難しいが、水中ではリラックスした様子で手足を動かしていたから。（重心担当） ・ シャワーやプールサイドではじめに水を体にかけられた時は、びくっとしたが、プールに入ってしばらくしたら、腰が落ち、力が抜けて身を任せたくれた。（重心担当） ・ 楽しそうだから（重心担当）
良かった ３名 筋ジス担当同数	・ 楽しそうだから ・ 頭を安定させて背浮きになり、カヌーをしたとき、「気持ちいい～！」と言っていました。 ・ 直接生徒には聞いていないのですが、アンケートに書いてある感想には、来年も入りたいと書かれていましたので、楽しくすごせたのではないかと思います。
普　通 ２名 筋ジス担当同数	・ 生徒の安全確保、体調管理の体制が甘かったので、部分部分で生徒に不安を与えてしまったと思う。また、プールについて病棟内（学校もだが）全職員の意思疎通もないため、病棟職員が生徒を責める場面もありました。プール内では子どもに新鮮な驚きと発見を与えられたと思う。 ・ 感想を求めると「面白かった」と言っていたが、表情は硬かった。この経験が今後どのようにいきてくるかが大事だと思う。
良くなかった ０名	

質問２：　担当した児童生徒はプール活動の時、安心して活動しているように思いましたか。



選択群	理　　由
とても安心していた　3名 筋ジス担当 2名	・「楽しい」「またやりたい」と何回も言っていた。その言葉からも安心して楽しんでいる様子がうかがえた。 ・はじめは怖いと言っていたけど、全然今は怖くないと本人が言っていた。 ・声を出して笑ったり、手足をばたばたと動かしていた。（重心）
安心していた １２名 筋ジス担当 9名	・体がヘルパーから少しでも離れると不安気だったが、くっついていると安心している様子がうかがえた。 ・次第に次のステップへ進むことができたり、こわいと言っていたが、後半はこわくないと言っていた。 ・最初は怖がっていた。徐々に友達に声をかけるようになったり、自分や足をを動かす様子が見られた。次に何をどうしたら良いのか、などを気にしてヘルパーに詳しく聞いていた。 ・入水の時は不安そうでもあったが、顔が水につかないことや体が水に浮くことを気がつくと表情が良くなっていった。 ・活動当初は緊張した様子も見られたが、中盤以降、笑顔が多くなり、リラックスした様子が見られた。 ・プール活動の経験があり、入水もこわがらず、退水までリラックスして取り組んだいたように思います。 ・安心していたが、不安になった時は「ちょっと・・」と担当に声をかけて、どうしてほしいか言ってくれた。 ・入水時は不安そうだったが、すぐに慣れて楽しく活動していた。 ・教師の指示に従って、スムーズに活動していた。 ・後ろで支えている教師を水の上にいる間ずっと笑顔で見ていた。（重心担当） ・背浮きや金魚泳ぎの時、脚の動きと一緒（反対方向）に顔を左右に動かしてリラックスしているようだった。（重心担当） ・入水の際は不安そうにしていたがすぐに慣れた。（重心担当）
不安そうだった 3名	・本人は大丈夫と言っていたが、私的には・・？という感じ。本当に安心して活動できていたら良いのですが・・・。 ・生徒が入っている際、浮力を得るために深く水中に入っていたが、口に水が入ることを恐がっている様子がプールサイドから見ているとき、気になった。（自分もだ・・・と反省した。）ヘルパーは生徒の顔を見ることができないので、気づくのが難しい。生徒のほとんどが嚥下障害であることを考えると反省が絶えない。 ・背浮きの時はリラックスしていたが、後ろから抱えた時には教師の手のひらをつかむようにしていたから。
とても不安そうだった。　0名	

質問３：担当した生徒がプールに入って学んだことは、気づいたことは何だと思いますか?

- 予想した以上に手足が動き、感動していた。
- 「自分もできる」という可能性を感じたのでは･･･。「水は怖い」と入水前に言っていた生徒本人も「またやりたい」と活動後は話していた。その変化は大変大きなことだと思う。
- プール活動の楽しさ
- 自分はもっとできるぞ！もしかしたら泳げるかもしれない!と思ったと思います。
- 達成感、成就感はあったのか。生徒に聞いて見なければわからないが、そうであってほしい。
- 手と足がしっかりと動くということ。陸上ではなかなか動くことができないが、水中では懸命に長時間足を動かしていた。また「けっこう動く」と驚きと喜びがまじった表情で話していた。
- 自分にもまだまだできるという可能性。良い笑顔をしていました。
- あお向けで浮いているとき、手足が良く動いていました。身体が動く、ということを実感し、また喜びも感じられたひとときだったのではないでしょうか。水に浮きつつ、水を飲まないように、沈まないようになどの緊張もあったことでしょうし、また退水してから身体の重さも感じたのではないでしょうか。
- 水は恐くないということ。このやり方だと楽しく活動できる。
- 自分ができることを再確認できたと思う。
- 特にあお向けの時、首以外の支持がほとんどなくても浮いていられることに驚きと喜びを表していた。しかも自分で水をかくこともでき、その推進力にも驚いていた。
- すぐにわかるものだとは思いません。今後の生活の中で行動が変わってくれば、効果があったということになると考えています。
- 楽しい活動だということ（重心担当）
- お風呂よりも広いところで水に入り、体を動かす（動かしてもらう）ことを体験したと思う。（重心担当）
- プールって楽しい！リラックスできる（重心担当）

未記入３名

質問４　：担当した生徒を見て、先生（ヘルパー）が気がついたことは何ですか?

- 思った以上に簡単に浮く。
- 壁を乗り越えた達成感、成就感のようなものを感じました。活動後、大変良い笑顔をしていました。
- もともと自分でやりたい!という気持ちの強い生徒だが自分なりに身体を動かそうと一生懸命だった。
- 泳ぐ前までは、水を思った以上にこわいと思っていることがわかった。
- 自分はもっとできるぞ!もしかしたら泳げるかもしれない!と思ったと思います。泳法を工夫すれば泳げるようになると思った。
- 首も不安定で背骨の変形がかなりある生徒だったので、自転車こぎの姿勢の時に顔がヘルパーの肩に当たった状態になっていたので、体が浮きやすく腰の位置を支えるのが大変だった。
- 入水を緊張の表情で待っていたが、入水後はだんだんと水に慣れ、積極的に体位を教師に指示していた。何回かの経験をすれば水に潜ったり、自分で泳ぐことも不可能ではないと感じた。継続したプー

ル活動の確保が望ましい。

- 表情から達成感や成就感のようなものを感じました。「自分にもできる」という気持ちの表れではないでしょうか。
- 今回は初めての試みであり、児童生徒が主体的に活動するというところまではいけなかったように思います。しかし、だからこそ次回はもっと自分で泳ぎたい、動きたいという意欲ややる気を引き出せるのではないかと期待したいところです。
- 水に入った時、私の首にかけた手がちゃんと組まれずにE君はとても慌てていて不安そうだった。しかしすぐに慣れて「自転車こぎの体勢してみる?」と聞いたとき「やってみる!」としっかりとした声で即答し、驚いた。友達の近くにも「行ってみる!」と積極的でうれしそうだった。
- 姿勢が安定していて介助しやすい。
- 普段は車いす同士なので、近づくにも限界があるため、友人や教師とより近くでかかわることができるのも、プールだからと感じた。
- 「泳げる！」この発見は大いに自信につながったと思う。入ってすぐ、生徒が寒さで口を震わしていた。中止するかどうか観察していたが、判断が難しかった。これが原因で風邪をひかせたら‥と思うと恐ろしい。
- 教師とマンツーマンで泳いでいるときよりも、友達と水のかけあいをしていた時の方がいきいきとした顔をしていました。生徒の立場に立って活動内容を考えていくことが大切だと改めて感じた。
- 浮力を使って、いい具合に浮いていることができるので水中で安定している。（重心担当）
- 水を嫌がらないんだなということ。担当が他学部の先生だったので驚いた。（重心担当）
- プールって楽しい！リラックスできる！（重心担当）
- きっと不思議な顔をするだろうと予想していたが、初めから笑顔が見られ、中学生の時にプールに入った感覚を覚えているんだなぁと感じました。（重心担当）

平成１７年度プール活動実施計画

１　目的

（１）児童生徒が楽しく安全にプール活動を体験する。

（２）生涯スポーツの実践として、プールの効果を理解する。

（３）水泳の体験を通してセルフエスティームを育む。

（４）病院や地域と連携し、相互の理解を深める。

２　プール実施日

平成１７年７月２８日（木）　入水時間　Ａ９：４０～１０：０５　　Ｂ１０：０５～１０：３０

３　場所

八雲町営温水プール（八雲町住初町 185 番地　3-3238）　３コース貸し切り

４　プール活動プール学習参加基準

1　本人からの明確な希望、保護者の合意、主治医の承諾

2　（本人からの明確な意思表示が難しい生徒）保護者の同意とプール当日の保護者の同行と主治医の承諾

５　参加希望児童生徒　⇒　参加生徒

1に該当

高等部（準ずる）		８名	⇒	７名参加	１名欠席
	（下学年適用）	５名	⇒	４名参加	１名欠席
中学部（準ずる）		２名	⇒	２名参加	
	（下学年適用）	１名	⇒	１名参加	
		１６名	⇒	１４名参加	２名欠席

2に該当

高等部（重心）	２名	⇒	２名参加	
中学部（重心）	２名	⇒		２名欠席
小学部（重心）	２名	⇒	２名参加	
	６名	⇒	４名参加	２名欠席

希望者２２名　⇒参加者１８名（DMD：１３名　ＦCMD：１名　ＣＰ：４名）

欠席者　４名（DMD：３名　　ＭｙＤ：１名）

5　当日日程

	各病棟にて体調確認　（各病棟に依頼）	
８：５０	３病棟出口から順次出発（各病棟に依頼）ストッレチャー⇒ﾀｸｼｰ(保護者・教員) （Ａグループ優先） 町営プール到着（到着次第着替え）⇒プールサイドへ	
９：４０ １０：０５	Ａ グ ル ー プ プール活動（ハロウィック活動＊１）	Ｂ グ ル ー プ
１０：０５ １０：３０	着替え・体調確認（着替え･体調確認が済み次第、病棟へ戻る）	プール活動（ハロウィック活動＊１）
１０：３５ ↓	町営プール順次出発 ↓　移動（タクシー利用） 八雲病院到着（病棟着）	着替え(着替えが済み次第病棟へ戻る) 町営プール出発（タクシー利用） ↓　移動 八雲病院到着（病棟着）

7　事前研修

プール実技研修（ハロウィックＦ／Ｄ１・２）　　場　所：八雲町営温水プール

1月１５日～１６日（２日間）　９：００～１７：００

プール実技研修　　場　所：八雲町営温水プール

7月１３日(水)　１５：５０～１６：４５

7月２６日(水)　１５：５０～１６：４５

着替え研修　《 担当：１～３病棟　》

見　学　　7月　8日（金）１３：３０～１４：４０

実　施　　7月 12 日（火）１３：３０～１４：４０

7月 19 日（金）１３：３０～１４：４０

トランスファー研修　《 担当：三浦理学療法室長》　　場　所　　理学療法室

日　時　　7月１１日（月）１６：３０～１６：４５

7月１４日（木）１６：３０～１６：４５

7月２１日（木）１６：３０～１６：４５

プール学習事前アンケート調査（本人の記入のみ１８名）

1に該当する児童生徒１８名にアンケートを配付　　（DMD：１７名　　ＦCMD：１名）

参加希望者　１６名　　プール当日参加者　１４名　（２名は風邪のため参加できず。）

希望しない者　2名

2に該当　　（重度心身障害　ＣＰなど）

参加希望者　　6名　　プール当日参加　　4名　（２名は風邪のため参加できず。）

希望しない　　4名　　理由：保護者の都合がつかず　　３／４名

過去の経験による保護者の判断　１／４名

○水泳活動アンケート集約 ＜児童・生徒＞

Ｈ１８．８．２９
水泳活動推進委員会

＜回答児童・生徒数：　　＞

１　プールに入ってどうでしたか？

Ａ　とてもよかった・・・　１０名
Ｂ　よかった　　・・・　６名
Ｃ　ふつう　　・・・　０名
Ｄ　よくなかった　・・・　０名

＜理　由＞
・手足が自由に動いてよかった。（３）
・身体が自由に動いて本当に自由だった。Ｆｒｅｅｄｏｍ！！
・身体がいつもより思い通りに動かせた（２）
・昨年より動くことができたから。また、いろいろな人（ボランティア）にヘルパーをしてもらったのがよかった。
・釘田先生と入れてよかった。（斉藤くん）
・普段入れないプールに入ることができたから。
・先生が慣れているせいか、安心して泳ぐことができた。いろいろな人にヘルパーをしてもらえてよかった。
・普段より体が動かせてよかった。

２　移動や着替えなどで気になった点はありますか？

・移動がスムーズだった。
・スムーズにいけてよかった。自分に合う車いすがあるともっとよいと思う。
・タクシーを待つ時間が長かった。（１病棟）
（・水泳帽がきつかった。）

３　プール活動全体を通して思ったこと、感じたことはなんですか？

・プールの時間が短い。もっと泳ぎたい。（６）
・もう少しいろいろな種目、活動をしたい。（３）
・もう少しできることを増やしたい。ゲーム的な活動もしたい。
・ジャンケン列車の替わりに何かをいれてほしい。
・親子で入るのはどうでしょう？
・手足、体の動きが水中では動きやすかった。

４　来年の水泳活動、あなたは参加しますか？

Ａ　絶対来年も入りたい　　・・・１４名
Ｂ　友達が入るなら入りたい・・・　２名
Ｃ　入りたくない　　・・・　０名

○水泳活動アンケート集約＜教員＞　　回答数：１５通

１　準備期間・研修について

・良かった。（５）
・着替えの研修はとても参考になり、大切だと思った。もっと積極的に自分からやらせてもらえば良かったかもしれない。「見させてもらっている」感が強くなってしまっていた。
・実技研修を休んでしまい、プライベートレッスンしてもらった。ありがとうございました。

・トランスファーや着替え研修など十分な研修が行えて良かった。
・問題はなかったと思います。着替え、移動の研修はとても有意義であり、来年も行ってもらいたいと思います。
・研修はとても役に立った。
・プールに入らない方も水泳指導法を学ぶ場として、研修会に参加するかたちににした方が良いと感じた。（貴重な機会ですし。）

２　当日主に担当していた活動・係で気になった点

＜水中活動＞
・フリーでプール内にいる先生、または病院職員、ボランティアの方がいて、とても助かりました。ゆとりがあった。来年もフリ　ーの先生をつけてもらえたら良いと思います。（４）
・ちょっとした揺れで首の座っていない生徒はカックンとなってしまうので、初めは不安になった。しかし寝た状態より、チェアーポジションが良いというので周囲の様子を見ながら片手で首を押さえてやった。どうにかやることはできたが、もし良い方法があれば次回に教えてほしい。
・ヘルパーの数が昨年にもまして多く、１人の生徒を交代で支援したり、ヘルパー２人で１人の生徒を支援したりといろいろできました。ＨＯＰの方がお手伝いにきてくれたことはとてもありがたかったです。今後はこちらもＨＯＰの手伝いができたら良いと思いました。
・児童生徒は２回目ということで、活動内容は次回はステップアップした内容にしても良いと思いました。児童生徒の実態に応じた内容を行ってもよいとおもいました。
・愛香先生がしっかり指示をしてくれて楽だった。
＜移動・着替え＞
・活動がスムーズにいったため、病棟に帰るのが早く、待機の先生と時間がずれてしまいました。携帯電話で連絡等すれば良かった。（２）
・着替えのＡグループは、プールの開館前だったので時間的にもスペース的にもゆったりとできた。やはり広いスペースはほしい。
・ＡＢＣグループが重なっている時、待ち時間や着替え、プール後の着替えなど、少しだけ重なることがありましたが、協力して連携をはかり、臨機応変に対応できたと思います。
・問題ありません。とても良い状況でした。
・プール到着後、着替え→プール内への移動の際の方法は確認されていたが、タクシー降車後の移動方法を係が把握できていなかった。他の係と連携して把握しながら進める必要があった。
・前日職員室に掲示された確認のプリントが移動係に配布されると良かった。
・良かった。
・問題はなかったです。
・タクシーの移動は楽だった。タクシーの乗せ降ろしも昨年よりスムーズにできた。三浦ＰＴの研修がよかった。
・着替えは昨年よりもスムーズにできた。
・ストレッチャーが使いたくてもすぐに用意できなかったり、更衣室が満室で廊下でしばらく待たされたが、ストレッチャーの台数、更衣室の広さはどうしようもないことであり、工夫できる点があればみんなで考えたい。
・１，３病棟で研修を受けたが、職員がとても協力的だった。感謝したい。
・当日は晴天だったので、ストレッチャーに乗った生徒はまぶしそうに移動しており、タクシーを待つのも同様であった。
・車いすの大きさなどもあり、ストレッチャーの数を増やすことでスムーズな移動ができるのではと思いました。
・ストレッチャーでの着替えや移動希望者など係で確認していたが、当日先生方が臨機応変に対応していただき、大変助かりました。
・バスタオルが予想以上使用され、追加借用していただいた。（１００枚＋５０枚）
多用途に使用されるので、多めに必要と思われます。

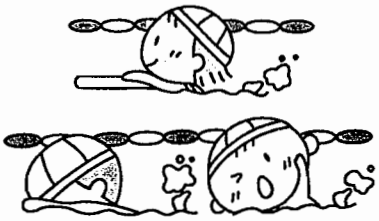
3　プール内での児童生徒の様子

・重心の生徒でしたが、リラックスした良い表情でした。水着に着替えてから、ストレッチャーの上で排尿がありました。前日までに排便を済ませるなど、可能な範囲で配慮できたらと思いました。
・楽しんでいました。多少緊張している生徒もいましたが、笑顔がたくさん見られました。経験のある生徒は楽しみにしていたし、楽しんでいました。初めての生徒も水に対して大きな抵抗はないようでした。
・「大丈夫、怖くない。不安はない」といっていたものの、向かい合った状態からチェアーポジションに変える時は、足でヘルパーの足にしがみつき、なかなか離れなかった。また、腹部を抱えている間、たまにヘルパーの腕を握ることがった。表情からも怖そうではなかったが、多少の不安はあったと思う。
・周囲の生徒に感化され、水に顔をつけてみたが、「間違えて息を吸っちゃった」と言うように、少しむせて苦しそうだったが、大丈夫だった。
・とても楽しそうにしていました。（３）
・とてもいきいきした表情でした。特にＣ組の生徒の表情に変化がありました。最初は怖かったのか、ふるえていましたが、入水しプールの水温にも慣れてくるととても良い表情をしていました。
・寒そうにする生徒もいましたが、ほとんどの生徒が良い表情をしていました。
・大変楽しそうでした。大はしゃぎでした。
・磯部さんでしたが、とても喜んでいました。体も心もリラクゼーションしたプール活動ができたと思います。
・児童生徒を含めてゆったりと活動に取り組んでいる姿が見られた。（午後）
・生徒は不安や恐れをを抱いている様子はなく、いきいきとしていた。卒業生の伊藤さんが本当に楽しそうな表情をしていたのが印象的でした。自分が担当した生徒は「もう少し体を起こして」「〇〇がしたい」と自分からどんどん依頼してきた。普段はあまり気持ちを表に出さないタイプのため、積極的な態度に驚いた。手足が動くことが嬉しそうで、「犬かきみたい」と本当に楽しそうに泳いでいた。
・担当した生徒はとても落ち着いた様子だった。友達が潜っている姿を見て、自分から「僕も潜ってみようかな？」と言い潜っていた。
・終始楽しんでいて、不安な様子も見られなかった。「楽しい、楽しい」と何回も言い、「もう終わっちゃうの？」と残念そうだった。

4　水泳活動の実践を通して思ったこと、感じたこと

・病棟や保護者等の調整を含めて本当にお疲れさまでした。
・プールに入れない児童生徒の活動が保障できるとよい。
・一生懸命手足を動かす様子が印象的でした。
・慣れていない活動でしたが、生徒とコミュニケーションをとりながら楽しませてもらうことができた。
・大掛かりな取り組みなので仕方ないですが、何度かやらせてあげたいですね。
・良かったと思います。良いプール活動でした。
・児童生徒の中に夏はプールという意識が出てきたと思います。来年度以降は、ぜひ「体育」の時間にプールに行けるようになればと思います。また、卒業生や入院患者ももう少し入れるようになればと思います。
・課外活動ではなく、教育課程に位置づけていたら良いと思う。子供たちにとっても年に一度の活動ではまだまだ心から楽しむ（リラックス）には至らないのではないでしょうか。年に数回実施し、どの子もゆったりと活動を楽しめるようになればと思います。
・小グループで教育課程に位置づけ、、体育や自立活動で学習できると良いと思います。
・今後体調等を考えながら、時間等の延長や内容の特化など考える必要があると思いました。（ 呼吸リハなど三浦さんや医長などのアドバイスをうけて）
・全体的な取り組みとして１学期中に行えると、もっと余裕をもってできるように思います。
・生徒はプール活動ができることを楽しみにしていた。実際に生徒と共に水中活動体験してみて、多くの感動がある活動であることを肌で感じることができた。本校の生徒の実態からみて、これほど有意義な活動はない。（断言できます）リスク管理も病棟との連携によりしっかりできており、この体制を維持していければと思う。今年は卒業生も参加しており、このことは在校生にとっても「卒業後も参加できる」という意識をもたせることができてよかった。

プール活動アンケート



今日のプールの話はどうでしたか。みなさんにプール活動についていくつか聞きたいことがあります。次のアンケートに答えてください。締切りは、６月15日（水）です。担任の先生に渡して下さい。

１　今までプールに入ったことはありますか。あてはまるものに○をつけてください。
プールに入ったことがある人は、最後に入った経験はいつか教えてください。

プールに入ったことが　　ある　・　ない

最後にプールに入ったのは　［　　］頃です。

２　今日のプールのビデオを見て、どう思いましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。他に思ったことがあれば、書いてください。

楽しそう　・　面白そう　・　こわそう　・　不安　・　プールに入ってみたい

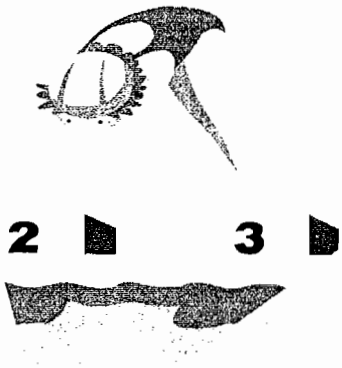
［　　］

３　夏休みの７月２８日（木）にプール活動を行おうと考えています。参加したいと思いますか。あてはまるものに○をつけてください

是非参加したい　・　友達が行くなら参加したい　・　わからない　・　参加しない

４　プール活動について思ったことがあれば、書いてください。

［　　］



プール活動ヘルパーアンケート

プール活動お疲れ様でした。今日のプール活動で担当の児童生徒はどのような表情だったでしょうか。ヘルパーのみなさんに今日担当した児童生徒の印象を聞きたいと思います。次のアンケートに答えていただけたらと思います。書き終わりましたら土屋までお願いします。

氏名　　担当生徒

1　担当した児童生徒はプールに入って良かったと思いますか。活動を通した印象として当てはまるものに〇をつけて、理由も書いてください。

とても良かった　・　良かった　・　普通　・　良くなかった

理由

2　担当した児童生徒はプール活動の時、安心して活動しているように思いましたか。当てはまるものに〇をつけて、理由も書いてください。

とても安心していた　・　安心していた　・　不安そうだった　・　とても不安そうだった

理由

3　担当した児童生徒がプールに入って学んだこと、気づいたことは何だと思いますか。

4　担当した生徒を見て、先生が気がついたことは何ですか。教えて下さい。

5　プール活動の実践を通して思ったこと、感じたことを書いてください。

どうもありがとうございました。

H17,8,26
プール活動推進チーム

プール活動反省アンケート集約

今年度計画１年目として、基本計画に基づき、次年度の取り組みを進めていけるよう、忌たんのない意見をよろしくお願いします。

Ｈ１６，１１，２６教務部「プール学習推進計画」より
１　長短期的な計画の概要
１）今、来年度の計画（平成１６，１７年度）
・指導者養成、希望児童生徒を対象としたプールでの活動の実践
・各教育課程におけるねらいと指導計画の策定
２）短期的な展望（平成１８年度）
指導者養成、希望児童生徒を対象としたプールでの活動の実践
（重度重複児童生徒の参加を促す）
各教育課程におけるねらいと指導計画の策定

１　プール活動実施計画全般について（７月１１日付、プール推進チーム提案）

・細かい計画まで御苦労様でした。
・計画提案時期はそれほど遅いわけではなかったと思います。研修をプール当月に行ったことは、記憶が曖昧にならず良かったです。
・プール計画自体は、あらゆる状況を想定し、きめ細かいものでよかったと思います。準備もしっかりできていたと思います。実際には、計画通りにはいかない場合があり、臨機応変さが必要でした。マニュアルに縛られ、非効率な動きもあったと思います。
・各機関の協力･連携がとれて良かった。今後の実施に見通しが持てた。
・やったことのない初めての活動ということで、提案の仕方、伝え方等など、大変であったのではないかと思います。ご苦労様でした。
・大変だったと思います。お疲れ様でした。
・全体的には綿密な計画がたてられていたと思う。時間の細かい部分については臨機応変に対応できるように、大雑把に計画されても良かったと思う。
・年度はじめから年間行事予定に大まかなものが入っていると良かったです。（他との兼ね合いで）
・全体が見えてくるまで時間がかかりましたが、今回経験したことにより、見通しを持って進めていけると思います。
・プール学習ができて良かったと思います。次年度は今年度の経験が生きてくると思いますし、教育課程に位置付けて実施できると良いですね。
･平成１６年度に提案され、１７年度実施の方向に向けて教務部、プール推進チームより早めに計画が出されていたが、共通理解不足の点が感じられた。１年目なので今回の反省を次年度に生かしていければよいと思う。分掌、推進チームの方は計画、準備など大変だったと思います。
・細案の全体提案が遅すぎたのではないか。提案後、変更点もあるので早めに全体で確認しながら行えると良い。
・全校で職員全体で動くと言うことが早くに決まっていたのに提案や状況報告などが遅かったし、不透明に感じた。また、個人で進めているように見えることもあり、あまり気持ちがプール推進に向かなかった。
・提案が遅れたため、直前になってあわただしく準備に入ってしまったと思います。次年度は早めの提案をお願いしたいです。
・今回は初めて取り組む活動、特に校外での活動ということで推進上、困難が多々あったかと思われます。その点で２点上げさせてもらいます。
①児童生徒の参加の有無を運動会時にとったということで、計画案が先送りになってしまったこともありますが、全体として職員提案が遅かったように思われます。新しい活動でもあり、病院との連携もあり、どのように進めてよいか思案された中での推進であったと思いますがいかがでしたでしょうか。
②プール学習推進チームは４名いたかと思いますが、意思の疎通が図れていなかった部分も見受けられました。また初めてのことなので多少はしょうがないと思いますが、一部の方で動いている感が強かったです。全体の提案の前にはチームで検討し、チームの誰に聞いてもある程度の説明ができると言う形がとられていれば、一部混乱が避けられたのではないかと思います。
③病院関係者（山下師長、三浦理学療法室長）が来てくださったのは、とても重要なことだと思います。今後どのような形であれ、プール学習を行う場合は必ず病院の方の参加をお願いすることが必要であると思われます。（児童生徒に何かあったときの判断は、教員ではできませんから）
・計画までの流れで、どうして学校の意思疎通が未熟のままで病院側と検討してしまうのでしょうか？理解が得られないから参加者が少ないのではないですか？私は参加しましたが、納得しないけど生徒が心配なので参加しました。病棟職員にもそれが見られました。衣服が少し濡れていることや到着時間が少し（５分です）ずれたことで、生徒が責められていました。理解が得られていない結果ではないでしょうか。
・昨年度の話であれだけたくさんの意見が出され、先生達も色々な不安が出されていたので、計画があまりにも遅かったと思います。

2　準備段階について

①児童生徒への指導	・映像を利用するなどわかりやすく、細かな説明ができていたと思います。生徒は混乱や不安が少なく、「プールが楽しみ」という声を多く聞きました。 ・ＶＴＲを見ながらの説明でわかりやすかった。当日の担当者についての各々の名簿を渡すのは安心につながったと思う。 ・生徒の食い入るような表情がとても印象的でした。映像もあり、わかりやすかったと思います。 ・全体説明の際、意思表示がはっきりできるＣ類型の生徒に配慮した説明の仕方が必要だったのではないか。（ＡＢ類型と違い、保護者が来ることが前提であれば、生徒の希望による決定にはならない。） ・良かったかと。 ・児童生徒のアンケートを見ると、プール活動に対して不安を感じた生徒がいたようですが、実施日が近づいてくると、かなり大きな期待感に変わっていたように見ていました。ＡＢ組の生徒はプール経験者も多く、活動のイメージもつかみやすかったのではないかと思いますので、事前指導は良かったと思います。 ・重度重複生徒の中には自分で意思表示できるのではないかと思われる子がいますが、保護者の付添が条件となると、あきらめざるを得ません。そこのところが気になりましたが、対象となった生徒へは担任が個別にきちんと対応していました。ただ各行程で担当してくれる先生が違ってわかりづらかったと思うので、今後はわかりやすく改善したらよいと思います。 ・スムーズにいったと思う。個々に対応できた。 ・細かな指導をされていたと思います。 ・楽しさばかりを伝える内容に思えた。 ・１回目の説明会、あまりにもプラス面ばかりを強調しすぎだと思います。マイナス面を伝え、その上で判断できるようにしなければならないと思います。条件が無ければ良いことばかりならば、自主的に総合的に、そして落ち着いて考えられる生徒でなければ、誰でも入りたい、と答えるのは当然ではないでしょうか？また人数に対しても抽選するような話はどこに行ったのですか？教師の人数確保ができていない状況で、あの人数を受け入れるから、業務に無理がくるのではないですか？無理がくれば生徒に負担がかかります。 ・子どもたちへの指導の仕方が難しいと思いました。話を聞いて盛り上げたら、みんなやりたいと思うと思うので、それでも保護者が来ないのでだめ、ということはかわいそう。
②保護者への説明	・良い ・次年度に向けていろいろな場面で啓蒙していくことが必要である。 ・保護者は自分の子どもがプールには入れるなどとは思ってもみなかったようで、プール活動の内容を聞き、とても喜んでいました。説明もわかりやすく、希望をいだけるような内容でした。 ・全体会での説明については良くわかりませんが、学級では丁寧に保護者に不安な点が残らないように説明した。 ・どのような説明をするのかも教師で共通理解してほしかった。 ・保護者説明会や担任からの電話、保護者懇談会などで十分説明できたと思う。 ・担任がどこまで保護者に説明するかがまとめて明記されているものがあると、よりわかりやすかったと思います。 ・丁寧さに欠けている部分があったのではないか。 ・活動の様子などをビデオでもご紹介できると良いと思います。 ・どこに何時集合で何をしたら良いのかをもっと早くに知らせたほうが良いと思います。担任の先生に親から質問されても学校の打ち合わせで変更変更になって定まらず困ったと思います。 ・聞いていないのでわかりませんが、職会での提案がないうちに保護者への説明を行ったことについておかしいと思いました。児童生徒への指導もそうですが、説明を聞いた子どもや保護者はぜひ入りたいと思うと思うので、確保できる職員数を考え、何人までならゆっくり安全に入ることができるかを計画してから募集したほうが良かったのではないでしょうか。
③職員の各研修	・大変有意義であった。 ・着替え、トランスファーの研修など、普段見ることのない生徒の様子、病棟職員の話を聞くことができ、大変有意義なものでした。特に着替えの研修は生徒の体を間近に見ることができ(即湾の様子など)、生徒理解、介助の上でも大変意味のあるものでした。 ・全員参加なのか、希望者のみなのか、役割に応じてなのかがわかりにくかった。 ・トランスファー、着替えの研修はとてもよかった。 ・各ﾁｰﾑの先生方、お疲れ様でした。有難うございました。ﾁｰﾑの先生方にたくさんの負担があったのではないでしょうか。次年度からはもっと分担していただいても良いかと思います。 ・ハロウィックの研修を受けましたが、プール活動自体はハロウィック法でなくても（もちろんハロウィックはとても参考になりますが)、指導の要点をおさえておけば安全に実施できるものなので、今後は学校独自のマニュアルを作成して、それについて研修する方法でも良いと思います。今回の実施については直前の研修日程が厳しかったと思いますが、手順としては良かったと思います。 ・普段体験できない着替えの研修などできてとても有意義だった。 ・職員同士での研修を行うことによって、当日生徒に対して自信を持って水中での活動を行うことができました。

	・担当はトランスファーでしたが、プールに入って研修もできて良かったと思います。 ・初めての試みだったので仕方がないと思うが、一気に集中して行うプログラムだったので、皆キツかったと思う。 ・多くの回数がありましたが、入浴時の見学では役に立つ点が少なく、病棟の方にとっても邪魔であったように思いました。次年度はなくても良いのでは‥。 ・着替え移動をはじめ各研修が病棟関係者の指導の元、行えたのは大変有効であったかと思われます。一点、参加の仕方について説明が不十分であったように思われます。希望者のなのか担当者なのか、わかりにくい部分があったと思います。

3　当日の係業務について（担当・担当外を丸で囲む）

トランスファーについて	・担当	・タクシー乗車は全く不安に思ったことはありませんでした。ヘルパーの池田先生と土屋先生が応援に来てくれる　まで、男性教員２人で、生徒の上げ下ろしをしていました。トランスファーは女性が多く困りました。 ・当日、アクシデント（保護者の到着が遅れた！）があり、心配しましたが臨機応変にできて良かったです。また,帰りも予定していた生徒以外の生徒と同乗することになり、普段全くかかわりのない生徒だったため、心配だったのですが、生徒のほうも支えてほしい部分などを言葉で伝えてくれて大丈夫でした。当日はいろいろなことが予想され、計画通りに行くことはむしろないと思います。今回のように、臨機応変に言葉をかけあって進めていけることが大切ですね。 ‥タクシー移動は当初難しいと思われていたが、案外生徒にとっては楽そうだった。臨機応変に対応できた。 ・タクシーの乗り降りが少し大変だった。座席の回転するタクシーの利用もあっては良かったのでは。 ・タクシーでの移動には特に問題がなかったが、乗車介助、病院間の移動で打ち合わせ、確認不足による問題があった。 ・Ａグループの児童生徒が戻ってきた時の人手が足りなかったようでした。 ・各生徒は皆特に問題なく、タクシーでの移動ができました。皆良い生徒でタクシーの中でも話ができました。プールを楽しみにしていたようです。 ・普通のタクシーに乗り降りする際には、何人もで抱いて介助できるわけではないので、男の先生が一人で抱きかかえての乗り降りになります。なので、女の先生が何人いてもできません。普通のタクシーで移動するのであれば男の先生が必ずいるような状態を作っておかなければならないと思いました。朝、出かける段階では指導員の先生方が多数お手伝いしてくださり、スムーズに出発できましたが、戻ってきた時は誰もいない状況でした。朝、子どもたちを送り出したとき後、室長から「帰りは何もしなくても学校で全部するといわれたけど大丈夫かい？」と聞いてくださったので助かりました。この段階で指導員の方に「前半、タクシーから降ろす際にお手伝いをお願いします。」と頼みました。成人の方との打ち合わせが入っていたそうですが、何とか調整していただき数名来てくださることになりました。Ａグループが戻ってくる時に学校側で全部対応するのは到底無理でした。最初に到着するのは宮本先生で、宮崎君でした。私と宮本先生だけで宮崎君を降ろすことができず、指導員の先生が来て下さるまで待たなければなりませんでした。帰り病棟への送りは学校職員になっていましたが、送っていくだけではなく、ベッドに上げるまでの仕事であったため、ここでも女性職員が一名で病棟へ送っていくのは無理でした。おまけに宮本先生はすぐに戻って次の子の誘導があったため、送る時間も無く、人もいなく、私も次の子が到着してしまい、その場を離れることもできず困りました。結局、指導員さんが病棟まで送ってくれました。しばらくたってから佐藤満先生や森先生が戻られましたが、病棟へ送った後、ベッドに乗せることを考えると「自分が行きますよ。」と送ってくださり、２人とも戻ってきていない時に、次の子が到着するという形でした。（ベッドに戻す時は空間が広いので、女性職員も数名いればできますが、女性職員もいませんでした）。無事に終了でき、ほっとしていますし、子どもたちも大変喜んでいると思います。が、課題は大きいと思います。次年度に向けて様々な方面から考えていく必要性を感じました。皆さん、ごくろうさまでした。 ・帰りの受け入れに人手が全く無く、ストレッチャーも用意されていなかったので困りました。指導員さん達は帰りは頼まれていないということでしたが、手伝っていただき助かりました。病棟との行き違いがかなりあったように思います。
	・担当外	・一応順番が決まっていたが、着替えが終わった順番にタ　クシーに乗るなど臨機応変にしていて良かった。 ・プール内にいてよく見えておりませんでしたが、送迎の　仕方や姿勢などの配慮へのため、ﾍﾙﾊﾟｰよりも大変だったのではと思います。ﾍﾙﾊﾟｰにとってもそうですが、普段か　らもっと子どもたちに触れ合って、着替え程度ならば誰　だってできるような準備は整えておく必要があるように思いました。 ・校外学習や日常の介助で行っていますが、特に配慮すべき点など新たに得た情報があったら、全体に知らせてもらえると今後の指導に行かせるので、ありがたいと思います。病院との連携（確認）、事前想定がかなり甘かったのでは？ ・人手不足と意識の低さからくる配慮不足。自分も気付きが足りなかった。
着替	・担	・普段見られないような子どもの笑顔や会話をやり取りしながら楽しく行えました。 ・担当を気にしている余裕がないほど忙しい状況でした。実際に更衣室にずっといたの

えについて	当	は６人ほどだったと思いますが、互いに声をかけ合って、スムーズに着替えをさせられました。人数は多いにこしたことはありませんが、この人数でも十分に可能だったと思います。改善点としては、 ①着替え担当者は担当生徒を固定せず、担当者間で声をかけ合ってすべきだと思います。 ②生徒の男女比率と、教員の男女比率が著しく異なる現状において、同性介助の考え方は、無理があると思います。着替えは仕方がないかもしれませんが車いす、ストレッチャーへの上げ下ろしなどは、普段から女性教員も慣れておくべきだと思います。 ・担当生徒以外の手伝いにも回り、進めたが、終了時に混雑していた。タクシーに乗せる生徒の順番が遅くなったりした。 ・事前の研修で当日、あわてずにできた。 ・車いすが多く、なかなかスムーズにいかなかったが、研修の甲斐もあり、何とかできた。 ・保護者と一緒でしたが、普段慣れた保護者がほとんど行ったので、私はオムツの処理やストレッチャー移動などを行うことができ、やりやすかったです。身障者用シャワーを使えて行いやすかったです。 ・手の空いている先生でうまく対応できたと思います。
	担当外	・女子更衣室は余裕だったが、男子は生徒先生共にきつかったのではないでしょうか？何か良い方法があれば・・。 ・男子更衣室で着替えの手伝いをしました。
ヘルパーについて	・担当	・生徒の喜びをダイレクトに感じることができ、大変大きなやりがいをもちました。ぜひ多くの教員にヘルパーを体験してもらい、同じ感覚を味わって欲しいと感じました。 ・今回の生徒の様子をまとめ、来年度に向けて残しておいたらよいと思う。中にはより難しい課題にチャレンジできる生徒もいるかもしれません。 ・水中では講習を受けたこととは違う動きや姿勢に戸惑いつつ、何とか近づけようと必死でした。生徒は促されるままの姿勢で、リラックスした表情で活動できていました。 ・自分の役割はきちんとできたと思いますが、活動が切り替わる時に混乱しないように、全体統括する人が計画通りに動いているかどうか、目配り、気配り、交通整理していかなければならないと思いました。 ・１月の講習から時間が経っていたこと、プール指導自体から自分が離れていたことで不安もあったが、子どもたちと活動ができてとても楽しかった。
	担当外	・男子生徒は体格の大きな子もおり、ヘルパーの教師が女性で、特に体格差が大きい場合などは大変だったと思います。次は体格差を考慮した配置にすれば良いと思います。

4　その他（推進計画の見とおしなど今後に向けた課題や改善案など）

・期待感を持ち、友達と興奮するくらい楽しそうに活動する様子が見られました。良かったです。
・更衣室を出る前の生徒の表情は、期待と緊張の入り混じった様子でした。更衣室に帰ってきた生徒の表情は、明るく、興奮気味で、「また入りたい。」「体が動いた！」など、感想を私たちに語りました。あれほど饒舌な彼らを見ることはあまりなく、驚きました。このような経験ができたことは使途にとって自信となり、楽しみを増やせたと思います。初めての試みで、私たちの不慣れは当然であり、うまくいかなかった部分が目立つのは仕方がありませんが、私たちも経験したことで、次はもっとスムーズに行くと思います。新しいことを恐れず、生徒とともにチャレンジして行って欲しいです。
・「人が足りない」という声もあると思いますが、現実として人出は限られているため、そこは工夫次第だと思います。今回は初めての試みなので無駄な部分があったと思います。
・生徒への病気への理解や、適切な介助方法、他の学校や病院の様子などについての勉強　不足と経験不足を反省しました。生徒の「安全」をしっかり考えるのは当然ですが、教員の力量不足からくる「不安」が生徒の可能性を狭めることがないように、日ごろから勉強していこうと思います。
・病院に研修をしていただいたことが良かったです。こういった機会がまたあれば、と思います。病院の助けもあってできたことと思うので、これからも関係を深めていければと思います。
・余裕のある提案日程と共通理解が必要ではないか。（今年度はやむをえなかったが）
・進行性の病気ということで、喪失感の連続であった生徒たちが「自分にもできるんだ。」と思える活動ををできたことは大変意義のあることだと思います。参加した生徒は皆、良い表情をしていました。今後、可能性を広げ、ニーズを生み出す教育、もちろん安全に留意した活動の提供ということは学校の大きな課題であると考えます。そのためには病院と連携し、活動を計画実践していくことが絶対に必要なことだとおもいます。様々な面で病院と手を組んで取り組んできた今回のプール活動はその意味で、大きな一歩で　あったのではないかと思いました。周囲（学校・病院・保護者など）の努力で生徒たちに「できる」という気持ちを持たせる活動ができるなら、今後ももっともっと汗をかいて努力　していくべきだと感じました。ぜひ今後につなげていきましょう！！
・思ったよりも腰が浮いた。お腹を見て立位になるのは高等部の生徒は厳しかったと思う。今回の反省をしっかり行ってほしいです。生徒が楽しそうで本当に良かったです。（事故も無くホッ）
・今後に向けてヘルパーの要員を増やさなくてはならないと思いますが、そのためには毎年講師を呼び寄せていかなければならないのでしょうか？
・実施にあたり、多方面の理解と協力があればこその実現できたことだと思います。病棟やタク

シーや町営プールの利用に際し、どのようなことをどこまで依頼すべきか、社会資源を利用する際のための勉強になりました。
・今回体調不良でお休みした生徒のことが気になります。高３で来年度のチャンスがない（？）子どももいたので･･･。また、チャンスがあれば良いのですが･･･。他の子どもたちも帰りのタクシーの中でも、楽しかったと答えていました。良かったです。
・推進チームの先生方、今日まで本当にお疲れ様でした。また、子どもたちのために実施できたら、と思います。
・一度全員でやってみるしかなかったので、今回このような実施の仕方はしょうがないと思いますが、プール学習の効能が表れるためには、年１回、それも重度重複は保護者付添が条件というやり方でなく、１シーズンに少なくとも３～４回は入るほうが良いので、そのためには、動きやすいグループ編成で全員が入れるようなやり方を考えていく方が良いと思います。年間を通してプールに関する研修を行い、誰でも自分たちの担当する児童生徒をプールに引率して指導できるようにする等、プールを実施する（教育課程に位置づける）のであれば、例えばそのような方策を講じる必要などしなくてはならない　のではないでしょうか。
・生徒も保護者もさらに病院も好意的受け止めていたと思うので、今後も継続していけるように学校も体制を作っていけたら良いと思う。
・今年度は午前の短い時間で行いましたが、可能ならば（プール施設の事情などもあると思います）午前と午後に分けても良いかもしれません。また、職員が全員参加になると人手にも少し余裕ができるかと思います。
・排泄コントロールができない児童生徒について、当日師長さんからお話がありました（水を汚染することにより、他の利用者にも菌がうつるなど）。便のことも心配ですので、きちっとした対応策があると良いと思います。（師長さんに「どう対応するのですか？」ときかれても答えられませんでした。プール用オムツがあるならそれを使えると良いですね。）。その他にも病院への連絡の仕方などいくつかご意見をいただきました。
・今回、各担当が出された反省点を細かく出し、その改善策を考えることによって次回は今回以上の活動になると思います。今回の反省点は確実に次年度に引き継いでほしいです。子どもたちの嬉しそうな笑顔がとてもよかったです。お疲れ様でした。
・八雲町教育委員会の方と教育長も来ていて、勝手ながら挨拶、お礼を良い、また来年もお願いします、とお願いしました。教育長「何かあったら言って！」教育委員会の方「道新に連絡すると良かった！」と言ってました。なるべく全員が入れるように工夫したいですね・・・。また来年ですよね。
・病院の協力について、救護も含めて最初から位置付けがされていたほうが良い。公共に施設の利用の仕方、プール側で良いといっても、濡れたままの車いすやストレッチャーの搬送はジューターンが濡れるので廊下、入り口（更衣室）などに配慮が必要と思う。今後、重心の児童生徒も全員が対象になった場合、排尿、排便対策（オムツ使用者）の点で、考慮する必要があるのではないか。
・１回の活動の人数を減らして、回数を増やせたらいいと思う。次年度以降も続けていけたらと思う。
・計画の推進が一部の人たちだけで決定していたような感じを受けました。職員が一丸となるためにも、もっとオープンに推進できればと思います。非常に大きなエネルギーを必要とする活動でしたが、子どもたちにとって本当にねらいとする目的が達成できるものなのか、もう一度考える必要があると思います。学校の設備がある所とは目的が異なるのではないでしょうか。学校の教育活動として本当に子どもたちにどのような効果があったのかを研修したいと思いました。
・生徒が寒さで口を震わせていた。中止かどうかの判断が難しかった。
・今後の対応：今回の水泳学習をうけて今後（次年度以降）どのように取り組んでいくのか、全体で反省をもち、それを受けて今後推進チームで原案を出し、全体で検討する。個人的にはこの流れでよいのではないかと思います。時間がたてば立つほど、みんなの頭から、プール学習を行ったときの子どもたちの笑顔が薄れていきますから、池田先生を中心に今後の取り組みについて推進していくことが大切だと思います。個人的には、子どもたちにとって貴重な大変有意義な時間だったように話を聞いていますので、何とか教育課程に位置付けて行うのが良いかと思います。
【前提】重度重複障害児童生徒　の対応で、保護者の付き添いが無くても、プールに入れる。これは本校にとって必要な　条件の一つだと思います。保護者の負担がかなり大きくなります。普段の学習で行うのなら特にこのことがクリアーできなければ、行えないと思います。【例】①グループを小中と高２つに分けて午前と午後で学習を行う。②水泳学習の日として特別活動で　位置付ける。しかし、この場合は前年度教務から提案された既存の校外学習の１つとして、位置付けるのではいかがと思います。あくまでも現在の２回の校外学習は児童生徒の実態に合わせた内容で実施できることを確保してほしいと思います。教育課程に組み入れない今回の形で行うのは学校として定着させる上では好ましくないかと思います。また、ある教員がボランティアと言う気持ちでやっていたという話を聞きました・・。いかがなものでしょうか？
・病棟関係者への説明と準備が足りなかったと思います。「確認済み」ということが、病棟側では初耳だったり、学校職員への説明と病棟職員への説明が違っていたりして、実際にどうなるのかと言うことが最後までわかりませんでした。
・重度重複児童生徒について、保護者同伴という形から抜けられなければ、教育課程上に位置付けることは難しくはないのでしょうか？保護者の参加が無理と言う児童生徒も多いので。子どもの様子を見ていると、とてもよい活動だということはすごく思うので、今回のように２０人以上を午前中で全部入れると言う計画ではなく、もっとゆっくりじっくり楽しめる形が良いと思います。参加した保護者からも同様の意見がありました。

資料2

留寿都高校の概要、交流会新聞記事

北海道留寿都高等学校概要

校長：大高　優　農業福祉科

所 在 地　　〒048-1731　虻田郡留寿都村字留寿都１７９－１

校　　訓　　『豊かな心　新たな挑戦』

学科及びコース

・農業福祉科　・募集定員　４０名

・修業年限　３年または４年（４年生進級者は、３年次に校内選考により決定）

・学科目標　農業及び福祉に関する知識と技術を習得させ、これに関わる業務に従事する者として必要な能力と態度を育てる。

・コース目標（２年生からコースに分かれる）

国際農業コース；外国農業の特質を理解し、日本農業についての知識を深め、農業及び関連産業に貢献できる人材を育成する。

農業福祉コース；社会福祉の特質を理解し、農業教育を通して、地域で活躍するための知識を深め、福祉活動に貢献できる人材を育成する。

学年別生徒数（平成１６年５月１日現在）

学　年	１　年	２　年	３　年	４　年	合　計
男　子	２０	１１	１０	２	４３
女　子	１７	１８	１０	３	４８
合　計	３７	２９	２０	５	９１
国際農業		９	５	１	１５
農業福祉		２０	１５	４	３９

卒業生の進路状況

区分 年度	進　学		就　職							計
	大学短大	専門学校	農業自営	農業関係	福祉関係	製造業	サービス	建築	その他	
平成12年度	３	１３	１		４				１９	４０
平成13年度	２	１１	１		８		８		５	３５
平成14年度	２	７	２		９	１	１４		５	３９
平成15年度	１	５	１	２	６		７	１	７	３０
平成16年度	２	３		１	９	１	３			１９

部 活 動

陸上部、野球部、女子バレーボール部、男女バスケットボール部、男女バドミントン部、男女卓球部

放送局、図書局

北海道新聞（夕刊）　2006年（平成18年）7月5日（水曜日）

道南

改築の八雲養護学校

きれいな花壇できたよ

留寿都高生と共同作業

【八雲】留寿都高（後志管内留寿都村）農業福祉科の二年生十四人が三日、八雲養護学校を訪れ、同校高等部の二十一人とともに、花壇作りの実習をした。（草間康弘）

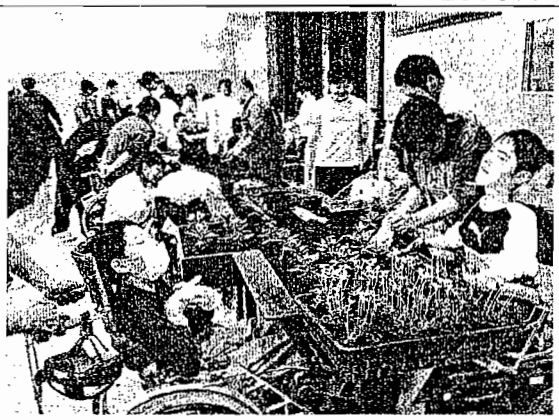
同科の生徒は、園芸によるセラピー（療法）などを学んでいる。両校の教諭が、以前同じ学校に勤めていたことが縁で、養護学校の改築に伴い整備される中庭の花壇を協力して作ることにした。

植えたのは、同高生徒が育てたペチュニアやトマトなど花や野菜の苗約四百株。車いすを正面に向けたまま作業できるよう、生徒が足元の部分を工夫した高さ一メートルほどの木製花壇も持ち込んだ。

あいにくの雨で体育館での作業となったが、両校の生徒は手を取り合ってスコップを握り、丁寧に花苗を植えていった。

車いす生活を送る養護学校の生徒は、園芸はほとんど初めての経験で、高等部一年の三宅博之君は「こんな花壇がもっとあればいい」と笑顔で土をかぶせていた。

今後も両校の生徒は、養護学校の花壇の様子を電子メールで伝えるなどして交流を深める。留寿都高の鈴木尚教諭は「十月の養護学校祭では育てた花を共同で販売したい」と話していた。



車いすで作業できる花壇に花を植える留寿都高と八雲養護学校の生徒

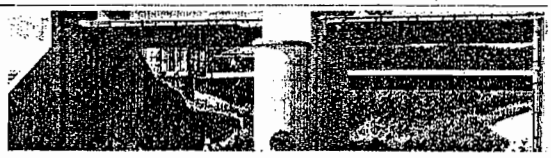
生育状況メールで交換

山菜採り遭難気をつけて

ごみ拾いで清流守ろう

今金、せたなのボランティア

後志利別川で清掃活動



【今金、せたな】今金、せたなの一級河川で清流日本

本書は、（財）みずほ教育福祉財団の
助成を受けて、刊行したものです。

障害児教育研究論文
—平成18年度—

筋ジス児を支援するための教育・医療のあり方に関する未来志向的研究

平成19年3月　印　刷
平成19年3月　発　行

編集・発行　（財）障害児教育財団
横須賀市野比5－1－1
国立特殊教育総合研究所内